

第55回 日本カトリック看護協会全国大会
in 仙台

大震災を乗り越え復興に向かって

生かされているいのちの分かち合い



集録集

光ヶ丘スベルマン病院のイエス様
青葉通り けやき並木

期日 2013年10月25日(金)～26日(土)
場所 仙台
主催 日本カトリック看護協会
担当 仙台支部



目次

開会式..... 1

基調講演 I

「キリストの輝き～マザー・テレサに学ぶ奉仕の心」

片柳弘史 5

パネルディスカッション..... 18

懇親会



感謝のメッセージ..... 33

基調講演 II

「大津波を乗り越えて」山浦玄嗣..... 36

閉会式..... 47

オプション

被災地見学..... 49

開会式挨拶

日本カトリック看護協会 会長 城 麗子



皆さま、台風27号が来ている中、お集まりいただきまして本当にありがとうございます。

2011年3月11日、午後2時46分、未曾有の大震災から2年7カ月が過ぎました。被災された方々に心からお見舞い申し上げます。震災の後、行方不明となったご親族の手がかりを現在も探しておられるお話を伺い、愛する方々を親戚やご友人を失った方々の心の中では本当に時間は止まったままなのだと、その苦悩の深さと現実の苦しみを想います。大震災による津波などの大きな被害に加え、原発事故による放射能汚染の不安もあります。多くの未解決問題を抱える中、私たちは心を合わせて神に祈り、2日間、先生方のご講演やパネルディスカッションからさまざまなことを学び、これから生きる私たちの使命は何なのかを考えたいと思います。本当に想像を越えた大震災を体験された中にありながら、たくましく本日このような大会を開催して下さった仙台支部の皆さま、本当にありがとうございました。私たちは今日と明日、大震災を自分のこととして一緒に考えて参りたいと思います。まさに今、生かされているんだという実感の中におられる被災者の皆さま、そしてご来場いただきました皆さま、仙台支部の皆さま共に命の尊さをみんなで分かち合う貴重な時間としたいと思います。

ところで、被災地でグリーンケアを続けておられる先生にお話を伺ったところ、被災地で7人家族だったところを6人も亡くしたという男性の方に出会われたそうです。「辛かったですね」と、それ以上の言葉は出てこなかったそうでした。そしてその方にたびたび関わっていく中で、少しずつ彼が立ち直って行って「目標をもって生きる。それが悲惨を生きるということなのだから」とおっしゃったそうです。大震災の後、日本カトリック協会仙台支部の皆さまもこの大会を辞退されるのではと案じておりました。ところが、「大震災があったから辞退するのではなく、むしろ私たちは、だからこそ大会を仙台で頑張ろうと決意した」という力強い言葉を下さいました。それこそが苦悩の中からキリストに希望を託し、後ろを振り向かずひたすら前に向かっていこうという聖パウロの生き方で、私たちカトリック看護師の福音宣教の生き方そのものであらうと思います。古閑支部長はじめ、仙台支部の会員の皆さまに改めて敬意を表したいと思います。

今日はご来席を賜りました仙台の平賀徹夫司教様、本部顧問司祭飯野雅彦神父、仙台支部顧問司祭シャル・エメ・ポルデュック神父、日本カトリック医師会仙台支部長の藤村重文先生にもおいていただいております。心から感謝申し上げます。また、ご出席くださいました全国のJCN A会員、光ヶ丘スベルマン病院をはじめ一般参加者の皆さまに心から感謝致します。この2日間が、キリストと共に「大震災を乗り越え復興に向かう」希望の日となるよう、心からの祈りを私たちの主イエス・キリストに捧げたいと思います。どうぞ今日明日の2日間、よろしく願いいたします。

仙台支部 支部長 古関 睦 あいさつ



皆さま、ようこそこの仙台にいらっしゃいました。しかも台風の中、こんなにたくさんの方々にお集まりいただき本当に感謝でございます。東日本大震災に際しては多くの方から温かい励ましの言葉、たくさんのお愛に包まれたご支援をいただき、仙台支部を代表し深く御礼申し上げます。この仙台の地で全国大会を迎えられましたのも会員の皆さまのお祈り、そして本部城会長はじめ皆さまのお力がなければ開催できなかったと思っております。

東日本大震災は未曾有の災害でした。震度7、マグニチュード8.9の揺れ、津波で亡くなった親類、友人、知人・・・その恐怖は、私たちの記憶から消えることはありません。大震災から3年目に入りましたが、ここ仙台に住み続ける私たちは「被災地」に生き続けていることを意識せざるを得ません。仙台教区は昨年示された「東日本大震災救援・復興活動にかかる『新しい創造』基本計画第3期の歩みの途上にあります。その計画に迎え、被災地へのボランティア活動を仙台支部会員有志は微力ながら継続しています。ボランティア活動が、カトリックの信仰をもつ者として、また看護師として、すべてのものを「存在させてくださった方」がおられることの証です。現在、被災地から多くのボランティアは手を引き、訪れる方は減少しています。3年目に入りましたので当然と言えるかもしれません。ただ被災地で「忘れないで」と叫んでいる人々と関わる私たちは、「あなたの大切な存在です」と言い続けながら寄り添っています。地道に寄り添い、傾聴し、祈りのうちに「安心・喜び」を伝えています。

このような中で仙台のこの地で全国大会を開催できる喜びは大きなものです。みなさまにたくさんのお支え、支援をいただきましたことに感謝しております。心から御礼申し上げます。開催できること、これは信仰年の大きな賜物です。信仰が問われ、生きるように招かれた時です。どうぞ、この2日間の大会が皆さまにとりまして有意義なときとなりますように。今も苦しんで助けを求めている人に寄り添う種になれば幸いです。そしてこれからも継続してボランティア活動を行っていただけますようお願いして私の挨拶とさせていただきます。



カトリック仙台教区長 平賀 徹夫司教

皆さま、こんにちは。台風27号の中、お集まりいただきありがとうございました。当初、「大震災を乗り越えて」とのお話をいただいたとき、実は全国からの支援・救援活動にあたった人たちが釜石に集まる予定でした。現状はどうなのか、またこれからどうするかということをお話するはずでした。それに出席しても本日のこの大会出席のために帰りの飛行機が飛ばないということになってはと思い、急遽中止し、こちらに参りましてご挨拶できることになりました。

皆さん、東日本大震災の被災地、被災者の方々のために本当にいままで支援に力を尽くしていただき、ありがとうございました。教会幹部が集まり、日本全国から被災地を支援しようとしております。我々はキリストの弟子として一つに結ばれ、苦しんでいらっしゃる方々を支援しようとしている。教会は全日本ひとつになりできることをしようと取り組んでおります。その中には多くの医療関係の方々が被災地に入り、本当にありがたいことでございます。カトリック教会関係だけで9000人近くの方がボランティアとして来てくださり、手を差し出して力仕事から寄り添いまで本当にさまざまな支援をしてくださいました。今、表面上はすいぶん復興が進んでいるように思います。皆さまも明日は被災地に入られる方もいらっしゃると思いますが、被災者の方々の気持ち、心の復興はまだまだなのが現状です。これからは、これまで以上に寄り添ってお力をお貸しいただけ、私たちは忘れてはならないのだということをお伝えいただきたいと思います。



この2日間、「いのち」ということで、皆さんお話しされるわけですが、どうぞよりよい研修会でありますようにお祈り申し上げます。

日本カトリック医師会仙台支部長 藤村 重文様

先程来、東日本大震災のことがいろいろお話に出ております。私ども日本カトリック医師会も物心両面で全国から大変な支援をいただきました。私どもは、そのいただいた支援をいかに有効に活用するかということで取り組みました。大阪の医師たちがこちらに入り、精神的ケアに当たってくださいました。50回くらい来ていただきました。心から感謝申し上げます。本来なら人見滋樹会長がご挨拶を申し上げますところですが、所用がございましたので、人見会長に代わってお祝いを申し上げます。



第55回日本カトリック看護協会全国大会をこのたび仙台市で開催されますこと、おめでとうございます。今回のメインテーマが「大震災を乗り越え復興に向かって」ということで、サブテーマは「生かされているいのちの分かち合い」という深い意味を持っているテーマであり、参加された皆さんにとって長く記憶に残り、これから生きていく中で大きく影響するものと思います。

さて、私が所属しております日本カトリック医師会は、ご存じのこととは思いますが昭和17年東京での日本医学会総会のときに全国から集まった11人のカトリック医師が東京の教会に集まり、当時の大司教様の祝福をいただき、以後日本医学会総会があるたびに集まり、そのときをもって日本カトリック医師会として総会を開くこととしてまいりました。一方、日本カトリック看護協会は、昭和32年5月3日付けで日本カトリック司教団の認可を受け発足しました。昭和33年の第1回大会の日本カトリック看護協会の全国大会が開催され、カトリック看護師を中心とした重要なテーマを発表され、仙台でもこれまで平成3年に第33回、平成15年第45回と全国大会を開催され、このたびの第55回全国大会で3回目の開催となります。なお、日本カトリック医師会仙台支部は平成21年から合同で支部交流会を開催しており、今年は7月6日、7日にわたり岩手県宮古市で第5回交流会が行われましたことを付け加えておきます。

今回、日本カトリック看護協会全国大会には、メインテーマである「大震災を乗り越え復興に向かって」であります。中でも「大津波を乗り越えて」という題目で講演される山浦先生には宮古市での交流会でもご講演をいただきました。日本カトリック看護協会の城麗子会長のお言葉にもありましたように、この第55回全国大会が復興に向かってたくましくキリストと共に歩んでいこうとする会員と、大会の中さまざまな思いを分かち合っていたくという成果をあげられるであろうことを確信し、お祝いの言葉とさせていただきます。

基調講演 I

キリストの輝き～マザー・テレサに学ぶ奉仕の心

イエズス会司祭 片柳弘史師



本日は、このような素晴らしい席でお話させていただけますことを心から感謝申し上げます。台風の話が出ておりますが、今回の台風はフランシスコという名なんですね。「台風フランシスコ27世来日！」そういうことを言っている人もいましたけれど（笑）。フランシスコ教皇は何かと話題になる方ですが、ちょうど今朝のミサで看護師さんたちのことに触れていました。どういうことだったかというイエス・キリストは看護師みたいなものだとされているんです。イエスは手を使って奉仕する方でした。いわば看護師のようなものです。イエスは私たちの傷

に手を触れ、私たちが癒してくださるのです。そのように言われました。看護師さんの働きというのは、まさにイエス・キリストの働きそのものである。今日は「キリストの輝き」ということでお話しますが、まさに教皇様がそのことをおっしゃってくださったのだと思います。

まず、私自身がどうしてマザー・テレサと出会ったかということ、マザー・テレサのお人柄などをお話させていただき、その後マザー・テレサの生涯を簡単に振り返っていきたいと思います。そして最後にどうしたら私たちがマザー・テレサに倣ってキリストの輝きになっていくことができるのか、その話に入っていきます。

ちょっとその前に被災地の話をしたいのですが、私はこの春まで神戸地区の支部長をしております。神戸地区11教会をあげて福島の子どもたちを神戸に招く「ふっこうの架け橋」というプロジェクトに取り組んでいます。福島の母子のストレスを和らげようと短期保養プログラムを始めまして、放射能のないところで思い切り遊ばせたいというものです。なぜひらがなで「ふっこう」なのかというと福島の「ふく」と神戸の「こう」を合わせて「ふっこう」なのです。昨日も「ふっこうの架け橋」の子どもたちが福島に行って桜の聖母で懇親会をして帰ってきたところです。ところがこの取り組みには、かなり大きな批判があるんです。「福島の人たちをあまやかしてはいけない」というようなことを言う人がいるんです。「そんなことをするから福島の人たちが止まり続けるんだ。逃げることだ」と、そんなことを言う人たちがいます。確かにその主張には一理あるかもしれませんが、もしかして5年後10年後に政府が大丈夫だと言っていますが、ガンやいろいろな病気が出始めたら、そのとき誰が責任をとるのかと言われれば、確かに私たちがしていることは無責任かもしれません。しかし、福島に住んで今苦しんでいる人たちに、そういう言い方をするというのは、正しいかもしれないけれど愛がないという気がします。愛がない正義というのは何も生み出さないのです。私たちはやはり相手の苦しみに寄り添うということから始めていきたいと感じています。昨日も幼稚園の先生や保護者の方などいろんな方から話を伺ってきたんですが、誰一人として全く不安を感じず、安心して福島に住んでいる人なんていないんです。みんなが、もしかしたら何か起きるかもしれない、でも経済的な理由であると

か仕事のことを考えると福島を脱出することはできない。自主避難といわれてもそれはできない。そういう中で自分たちをある意味、責めながら苦しみを抱えて毎日生活をしているというのが福島の方々の現状なんです。その人たちに向かって「なぜ逃げないんだ、子どもがどうなってもいいのかそれでも親か！」というような言葉で詰め寄るといのは、いったい何だろうか。どこにも愛がない。そのような態度は、キリスト教徒は絶対とらないと私は思っています。なぜ住んでもいない人にそこまで言われなければならないのか。幼稚園を開園しているだけで「子どものいのちを危険にさらしているのか」と脅迫電話が来るんです。そういうことを言うのなら、引っ越しするお金と別の土地で仕事ができるよう準備してくれるならいいのですが、それもなしにただ脅迫してくる。私たちはそういうような苦しみを抱えている人たちの心に寄り添うことから始めたい。イエスは苦しんでいる人たちがいるとき、その人たちを裁くことは絶対にしませんでした。イエスがしたのは苦しむ罪人や病人、売春婦がいたら、その人たちのところに出掛けて行って、その人たちに寄り添い、一緒に話をし、食事をする、その人たちと触れ合う。そこからすべてを始められたわけです。裁いたのは思い上がっている人たちに向かって、「あなたたちは呪われている」と、きつい言い方をしたけれども、しかし自分自身が弱い罪人であると自覚している人たちに対しては、イエスは寄り添うことから始めたということです。そこにキリスト教徒として私たちが福島の人たちに対して寄り添うことが、キリストの目指す贈り物があるのではないかと思います。

そのようにして、貧しい人苦しんでいる人に関わられたイエス・キリストと全く同じように関わられたのがマザー・テレサです。私はこのような貧しい人たちとの接し方をマザー・テレサから学んで、今実践しているに過ぎません。ですので、マザー・テレサのお話に入っていきたいと思います。

マザー・テレサとの出会い

まずはマザー・テレサと私の出会いということです。実は私はキリスト教とは全く関係のないところで育ちました。私は埼玉県の田舎の園芸農家の出身です。家には普通に仏壇、神棚があり、天皇陛下のお写真があるというような普通の家庭で育ちました。そういう私がマザー・テレサを知ったのは私が10歳のときでした。マザー・テレサが日本に来られたんです。1981年のことです。そのときに24時間テレビという番組でマザー・テレサの姿が1時間くらいにわたって特集されていたんです。何げなく観ていた私でしたが、アフリカの子もたちにスプーン一杯の食事を運ぶ仕事を続けているその姿を観て、ものすごい衝撃というか感動したんですね。テレビを通じてですが、マザー・テレサの姿が光輝いているように感じられたんです。当時はアフリカのエチオピアで大飢饉が起こっていました。そしてその様子が毎日テレビに映し出されていました。やせ細ってハエがたかっているような子どもを抱きかかえている母親の姿が来る日も来る日も映しだされている。私は幼心になぜこのようなことが起こるのか、そして何よりもどうして誰も助けに行かないのだろうと思っていました。同じ人間なのに、日本にはこんなに食べ物もたくさんあるのにと思っていた矢先にマザー・テレサの姿を観たので、ああやっぱり、ちゃんと助け

に行く人がいるんだと思いました。それでアフリカやインド、日本でも苦しむ人を助ける人になりたいと思うようになりました。それがひとつの出発点です。その後、キリスト教とはまったく関係のない中で育っていったんですが、高校生になり自分に何ができるのかと考え、法律を勉強しようと思いました。大学で法律の勉強を始めましたが、大学3年のときに父が心筋梗塞で亡くなってしまいました。健康そのものだった父でしたが、畑に出ているときに倒れ、帰らぬ人になってしまいました。そうした状況で自分の人生とは何なのかと考え始めるようになりました。これまで貧しい人や苦しんでいる人に奉仕するといっていたけれど、実際は偉くなり、りっぱになり誉められたいという自分ではなかったか。そして暇があれば貧しいひとに奉仕するというような人生を送りたいと思っていたのではないかと気づいたんです。そういう中、たまたまカトリックの神父さんの本に出会い、その神父さんのやっておられる講座に出掛けていったのが、私とキリスト教との出会いといっているかと思います。その講座で神父様が「すべての人は神様のものであって、どんな場所に住んでいようが貧しかろうが、まったく変わりなく神様は愛してくださっている」というお話をしてくださいました。ああ、これは私が子どもの頃から思っていたことだと、洗礼を受けることになりました。洗礼を受ければ生きる意味とか人生の目的とかが見つかるかというところがよくない。もっとキリスト教には何かあるはず。自分には何が欠けているんだろうと思ったら、頭で勉強しただけの私には祈りとか愛の実践をもっとしていかなければ！と思いました。そのときにふと思い出したのがマザー・テレサのことをもう一度勉強してみようということでした。本を読んでいくうちにマザー・テレサのシスターが日本の東京と名古屋で働いているということがわかりまして、東京のシスターに電話をしました。シスターたちは土曜日の午後に来れば一人暮らしの老人たちを集めカラオケなどをやっているから、そこに来てくれればきっとみなさんが喜んでくださいますよと。電話の最後に「私、ひとつ質問があるんです、マザー・テレサの本をいっぱい読んだんですが、亡くなった年が書いてないのですが、何年まで生きておられたんですか」と言いました。そしたらシスターは大笑いし「マザー・テレサは生きてカルカッタにおられますよ」と言うのでした。私はもうびっくり仰天です。私は死んだと思いこんでいたんです（笑）。だって世界偉人伝とかに載っている方ですからね。

だったら、会いに行こう！と思いたったわけです。ちょうど大学を卒業する時だったので、インドに渡って会いに行ったのです。リュックを背負い出掛けていきました。空港から30分くらいの4階建の家で、呼び鈴を鳴らすとシスターが出てきたので「私は日本からマザー・テレサに会いにきました。どうぞ会わせてください」と、いきなり何の連絡もなく言うと、シスターはたいへん驚いていましたが、どうぞ中に入りなさいと招いてくれました。2階の事務所の前まで案内してくれ、そこにある椅子に座って待っていました。中から今度はインド人のシスターが出てきました。次に出てきたシスターはすいぶん年齢をとって腰は曲がり、色の白いシスターでした。最初のシスターとは違うなあ、でもどこかで見たことがあるようなと思ったら、その人がマザー・テレサご本人だったのです。あのときの嬉しさといったら今でも忘れないですが、叫び走りたくなくなるような嬉しさでした。そんなにも早く会えるとは思っていなかったのでものを話していかけてもいかなかったんです。そこで「サインしてください」と言ってしまいました。マザーに出会い、そのほほ笑みで見つめられ私の手を握りしめてくださったときに、私はこの人の

側に居続けよう！側に居続ければ自分の探している生きる意味や人生の目的が必ず見つかるに違いないと確信しました。聖書にも弟子たちがイエスに出会って後先考えずすべてを投げうって従うことが書いてありますが、その気持ちがわかります。私も日本ではいろいろなことがありましたが、マザーの側に居続けようと決意しました。マザーに出会った人はみんな私と同じように思ったようです。多くの人が言うのは、マザーに1回だけ会っても、「私こそがマザーに世界中でいちばん愛されている」と。これは滑稽なんです、みんなそういうふうになってしまうというんです。これもイエスにとっても似ていると思います。マザーは「たくさんの方が私の元を訪ねてくれるけれど、そのとき目の前にいる人がイエス・キリストなのです」と語っています。確かにマザーはそのときそのとき、目の前にいる人をいちばん愛している。訪れてくるすべての人の中にキリストを見出しているのです。

マザーと出会った人たちは、その人生を変えられていくわけです。例えば、オーストラリアからご婦人が訪ねてきたことがあった。農家の仕事を終えたままジーンズを着てそのまま飛行機でやってきたような身なりの人だったんですね。話を聞いているうちにとても気の毒な事情があるということがわかった。ご主人がアル中になってしまい、息子も不良になってしまった。母親の自分に暴力を振ったりする。そういうなかで思い詰めてもう死のうと思ったというんです。ただ、このまま死ぬのは嫌なので尊敬するマザー・テレサに一度だけ会ってそれから死のうと思って着のみ着のまま来たというんですね。そして1時間くらいマザーと話しました。マザーは話している間、ずっと手を握り相手を慈しむまなざしと申しますか、相手の向こう側に目に見えない何か大切なものを見ているということが確かにわかるまなざしで話を聞き続けたんですね。その後、彼女は私たちに向かって「もう用は済んだから私はオーストラリアに帰ります。死ぬのはもうやめました。一人でも私のことをこんなに大切に思ってくれる人がいるんだから死ぬのはもったいない。もう一度生きることになります」と言ってオーストラリアに帰ったというようなこともありました。そのように多くの方が生きる力をもらったのです。

私もマザーに魅了されて毎日「死を待つ人の家」で働き始めました。朝にミサがあり、午前中はその施設で働き、夕方またマザー・テレサの家に集まりお祈りをするという毎日でした。ある日、「死を待つ人の家」の活動が終わった後、いつものようにマザーの家に戻ったんです。夕方の祈りが始まる前に私は廊下で立ち話をしていたんです。とにかくマザーはいつも忙しい方なので家でもなかなかお会いすることができない。ところが、その日は私のほうをキッと見てスタスタと歩み寄って来られたんです。マザーは、背は140センチくらいですが、手も足も大きくてスタスタと早く歩く方なんです。その時は私の腕をつかんで「あなた、いつまで迷っているんですか。早く神父になりなさい！」と言われたんです。確かに私は人生に迷ってカルカットに來たのですが、神父になろうなどこれっぽっちも考えたことはなかったんです。そんなことは私には無理だと思っていました。しかし、マザーが自信満々にそうおっしゃるので、もしかしたらこれは神様からの呼びかけなのかなと思い、それが神父になることを考えるきっかけでした。なかなか一筋縄ではいかなかったのですが、マザーの修道会に入ろうかとも思ったんですが、結核になってしまいマザーが心配して日本に帰れというので半年くらい入院しました。ですから看護師さ

んには頭が上がらないんですよ。本当にお世話になりました。今日はその罪ほろぼしです(笑)。何とか元気になり、26歳のときでした。イエズス会に入会し、37歳で神父になり現在5年目になります。

マザー・テレサの生涯

では、ここからはマザー・テレサの生涯について話していきたいと思います。準備の間、ちょっとクイズをしましょう。マザーはどこ出身でしょうか？マケドニア地方で生まれたのですが、ここはマザーが生まれたときには今と違う国名でした。さてどれでしょう、手をあげてください。ユーゴスラビア連邦、マケドニア共和国、オスマントルコ帝国。はい、正解はオスマントルコ帝国です。もともとはギリシャ正教の国でしたがイスラム教の国、そこに移り住んできたアルマニア人の移民の子どもでさまざまな宗教が入り混じったところで育った人なんですね。ここからの写真は主に私が撮影したものです。

マザーは1910年マケドニアに生まれました。父ニコラ、母ドラナ、兄ラザロ、姉アーガの5人家族でした。マザー・テレサのお母さんの話を最初にします。あまり紹介されたことはないのですが、マザーの生涯で大きな影響を与えたのは誰かという、それはお母さんなんです。お兄さんのラザロが、マザーが有名になったとき、こう証言しています。「あなたがたがマザー・テレサと呼んでいる人物、あれはうちの母のコピーだ。年齢をとっていくほどそっくりになっていく」。そのくらいお母さんにそっくりだったというのです。少女時代のエピソードがあります。兄弟が夜、明日の学校の準備をしながら、あの先生は嫌だなど悪口を言っていたら、「そんな無駄話のために電気を使ってはいけません」と一晩中、電気を消してしまったそうです。また、マザーが9歳のとき、父親が亡くなり、お母さんはお店を開き大変苦労して子どもたちを育てたのです。ある日、お客さんが来たのですが、店先でその人がご主人の悪口を言いはじめたところ、お母さんが「そんな悪口ばかり言うなら出ていきなさい」と、追い出してしまおうんですね。マザーは「せっかくのお客さんを追い出していいのか」と聞くと、お母さんは「お金は私が何とかします。いちばん大切なのは、神様を悲しませないことです」と、きっぱりと言ったそうです。これがもし「神様のバチが当たるわよ」だったら、どうだったでしょう。バチを当てる神様というのは私たちのすることを厳しく見張っていて怖い存在です。意味が違ってきますね。そうではなく神様は私たちを愛してくださっているから神様を悲しませることは絶対しては行けないということがこの一言に集約されているわけです。そして、これがマザーの人生の指針となったわけです。まさにこのお母さんがいてマザーがあるのだと思います。

私がみたマザーは、例えば夜になると4階建ての大きな修道院の隅々まで見回り、全部電気を消してから寝るのがマザーの日課でした。自分で階段の電気も消すんですが、その後、階段から落ちてしまったこともありました。また、マザーはいつも壁際の位置に座っていたのですが、その壁のちょっと上のところに電気のスイッチがずらりと並んでいたということからだったんです(笑)。ミサのために神父さんたちが入ってくる直前に電気をつけ、終わると即、電気を消すこ

とを自分でやりたかったんですね。また、激しい気性というのもあります。ミサが終わった後、シスターたちが聖堂でお喋りをしていたところ、マザーは一人ひとりのシスターの手を引っ張って、外に出してしまったというのです。「あなたたち、あそこにとなたがいらっしやるか忘れてしまったの！あなたたちがベチャクチャお喋りしていたらイエスは悲しみますよ」と、言われたそうです。まさに、この母にしてこの子ありということです。そのほかにも毎日お母さんにくっついて教会に行き、奉仕の心を母に学んだという、それがマザー・テレサのお話です。

そんな大好きなお母さんと別れ、インドに旅立ったのが1928年18歳のときでした。それはひとつの出会いがあったからなのです。ひとつの手紙がマザーの通っていた教会にインドから送られてきました。宣教師として出掛けていたイエズス会員たちが送ってきたのです。その手紙の中にはインドの人たちの悲惨な状況が書かれており、マザーは、私が行って助けたい！神様の子どもたちが苦しんでいるのを放っておけないと、ロレット修道会に入会し、カルカッタに旅立ったのです。約2カ月かかってカルカッタに到着しました。当時、インドは英国の支配下にあり活気のある街で、修道院はその真っ只中にあり、おそらく世界でいちばん喧噪の中にある修道院だと思います。

1930年、マザーは教師として働き始めます。学校で働き貧しい人たちのために病院の手伝いも始めました。それまで歴史とか地理などを教えて聖マリア女子高等学校の校長にもなりました。1946年、マザーはダージリンに向かう列車の中でキリストと出会うんです。マザーは死ぬまでそのことを一言も話すことはなかったんですね。列車の中でいったい何があったのか。「十字架上からイエスははっきりと『私は渇く』とおっしゃった」。イエスは何に渇いていたのか。私たちの愛に渇いていたのです。神の渇きを癒そうではありませんか（マザーの言葉）。「神の渇き」とは何でしょう。愛とは、愛するということと愛されるということが合わさって愛となるのだというんですね。一方通行の愛は不完全で、一方の愛に相手が気づいたときに二人の愛は完全なものになるのだと。貴い愛は「愛の双方向性」であるんですね。例えば放蕩息子の話があります。どんな酷いことをした息子でも父親は愛し続ける。しかし、この父親の愛が完成したのはいつかということ、息子が自分のした悪いことに気づいて帰ってきて道の上で抱き合ったときに二人の愛は完成したといえると思います。そして、帰ってきてほしいと願い待ち続けているときのその思いこそが愛の渇き。息子に気づいて帰ってきてほしいと願う無償の愛。愛すれば愛するほど渇きも大きくなっていきます。イエスは十字架上で自分の命を最終的に私たちに与えるほどまでに私たちを愛してくださいました。その十字架上でイエスの愛はピークに達したといっていると思います。そのとき、やはり渇きもピークに達したのです。そのときにイエスの口から出た言葉が「渇く」ということだったのです。ですから「渇く」というのはイエスの愛そのものが愛以上のものだったとマザーは言うのです。それまで私は神様の愛を知らなかったときえマザーは言っているのです。この神様の愛に出会った直後、マザーはこの愛に応えたいと、スラム街で貧しい人のために生きていこうと決意するのです。「1946年9月10日、ダージリンに向かう旅の途中で私が受けた力強い神の光と愛こそ、『神の愛の宣教者会』の出発点でした。『神の愛の宣教者会』は、愛したいという、また愛されたいという神の無限の望みの深淵から出発したの

です」(マザーの言葉)。1948年、マザーはスラム街で貧しい人や孤児たちのための奉仕活動を始めます。(写真)この壁ひとつを隔てたところがスラム街で、子どもたちがたくさんいます。この広場の隅っこがマザーが座っているところでした。マザーが青空教室をはじめたときもきっとこのような感じだったと思います。そんなマザーのところに少しずつ教え子たちが集まってきました。1950年『神の愛の宣教師会』を設立。これも驚くことなのですが、将来を約束されたりっばな家庭のお嬢さんたちがマザーとともに貧しい人たちのために将来を捧げますと集まったのです。マザーがどんな人だったのかを知っていれば、ああそうかなと思えると思います。(写真)この家の3階でマザーは共同生活を始めました。この方たちが最初のメンバーです。この方がお医者さんになってマザーの最後を看取った方ですね。今、87歳です。1952年、『死を待つ人の家』を開設します。マザーは子どもたちを教えるだけではなく、道端で死にかけている人の世話を始めます。マザーは治らない人でも大切な神様の子どもなのだからめんどろをみる必要があると、ヒンズー教の有名なお寺の一角にある建物を市役所から借り受け、治療にあたりました。カルカッタは共産党の支配下にあったので宗教のことは無視して全面的に協力してくれたのです。もちろん、ヒンズー教徒は面白いわけがなく、抗議活動があったり迫害されたのです。こういうことがあったそうです。抗議活動があり警察署長がそこに来てマザーたちがほほ笑みを浮かべながら今にも死にそうな人々の汚物の世話などをしている姿をみて、抗議している人々に「マザーたちを追い出すのなら、あなたの母親や妻、娘を連れてきてマザーと同じことをさせなさい。そうしたらマザーをここから追い出してもいい」と言ったそうです。マザーたちの活動はキリスト教拡大のためとか、そういうことではないのだと。まぎれもなく純粋な愛があるのだから協力しようと、少しずつ受け入れられていったのです。

(写真) マザーの笑顔



この笑顔で見つめられると、なかなか離れられなくなる(笑)。マザーの活動は少しずつ海外に広がっていきます。「私たちの国では誰も助けてもらえない」という言葉を聞くと、マザーはどんな国にでも出掛けていくわけです。1965年です。その社会で誰からも相手にされない貧しい人たちがいるところにです。周りの人たちはいつも大丈夫だろうかとハラハラしていたのですが、マザーは涼しい顔をしてあちこちに施設を作っていました。すごいことです。

1979年、ノーベル平和賞を受賞し、1981年初の日本訪問です。東京と大阪にいらっしやいました。1997年87歳で昇天されました。最後の言葉は「イエスあなたを愛しています」でした。すぐインドから国葬にしようという話があり、マザーに最大の敬意を表しました。博物館からインド独立のときにイギリス軍から引き渡された砲車を出し、マザーの柩はカルカッタ市内を行進しました。こうした葬儀はガンジー、ネールに続いて3人目でした。マザーのお墓は『神の愛の宣教師会』1階にあります。これがマザーの生涯です。

マザー・テレサの言葉

「マザー・テレサの言葉」というプリントをご覧ください。

マザー・テレサの言葉

1. マザーとの出会い

「わたしのところにはたくさんの方が訪ねて来ますが、そのときその時で目の前にいる人がイエス・キリストであり、わたしにとってすべてなのです。」

2. マザーの生涯

「一番大切なのは、神さまを悲しませないことです。」(母ドラナフィル)

「十字架からイエスははっきりと『わたしは渴く』とおっしゃいました。イエスは何に渴いていたのでしょうか。わたしたちの愛に渴いていたのです。神の渴きをいやそうではありませんか。」

「1946年9月10日にダーズリンへ向かう旅の途上でわたしが受けた力強い神の光と愛こそ、『神の愛の宣教者会』の出発点でした。『神の愛の宣教者会』は、愛したいという、また愛されたいという神の無限の望みの深淵から出発したのです。」

3. マザーに学ぶ奉仕の心～社会事業とキリスト教的奉仕の違い

「痛みを感じるまで愛しなさい。」

「わたしたち自身の苦しみがなければ、わたしたちの仕事はただの社会事業になってしまいます。とてもよいもので、人々の助けになります。イエス・キリストのための仕事ではなく、主の贖いのみわざの一部にもなりません。」

「わたしたちの人生、孤独、苦しみ、そして死さえ分かち合うことによって、イエスはわたしたちを救おうとされたのです。わたしたちとすることによってのみ、イエスはわたしたちを救われたのです。わたしたちは、同じことをするのをゆるされています。貧しい人々のすべての苦しみが贖われなければなりませんし、わたしたちはその苦しみを分かち合わなければなりません。物質的な貧しさだけでなく、精神的な貧しさもです。」

「わたしたちの使命は、苦しんでいる人がいれば世界中どこにでも行って、その人と一緒に苦しむことです。」

「貧しい人々の中に、キリストを見つけなさい。」

「もし人々がわたしたちの中にキリストを見るよう望むなら、まずわたしたちが人々の中にキリストを見なければなりません。」

4. 自分を愛するように隣人を愛する

「悪魔は人生の痛みや、わたしたち自身のあやまちを利用しようとしています。イエスが自分を愛しているなんてありえないという考えが、あなたたちに忍びようとしています。そして悲しいことに、その考えはイエスがあなたたちに語りたくて願っていることとまったく反対なのです。」

「自分は愛に値しないと思っているときですら、イエスはあなたたちを愛しているのです。もし他の人々から受け入れられないときも、自分で自分を受け入れられないときでも、イエスはいつでもあなたたちを受け入れるのです。」

「イエスから愛されるために自分と違ったものになる必要はないのですよ。信じなさい、あなたたち

はイエスにとってかけがえのないものなのです。」

「もし神の前でありのままの自分を受け入れるなら、どんな称賛もその人を思いよらせることはできないし、どんな悪口もその人を傷つけることはできません。」

“マザーに学ぶ奉仕の心～社会事業とキリスト教的奉仕の違い” どうしたら私たちの活動が単なる福祉活動でなく、キリストの輝きを運ぶ奉仕になっていくのか。マザーがいちばん強く言っていたのが「痛みを感じるまで愛しなさい」ということでした。「私たち自身の苦しみがないければ、私たちの仕事は、ただの社会事業になってしまいます。とてもよいもので、人々の助けになりますが、イエス・キリストのための仕事ではなく、主の贖いのみわざの一部にもなりません」と、そこまで言っています。私たち自身が貧しい人々と苦しむ、痛みを感じるまで愛する、それがあって初めて私たちの活動はイエスの贖いのための一部になる、イエスの光を輝かせるのだというのがマザー・テレサの揺るがぬ信念だったわけです。

なぜ、マザーがそう言うのか、それを説明させてください。確かにマザーも言っていますが、食事を届けたりとか体を拭いてあげたり、それは素晴らしい。しかしマザーがキリスト教の救いというのは何かを与えて満足するというのではないのだと。これはマザー・テレサの救済論と言っていいかと思うのですが、キリスト教の救いをマザーはどこにみていたかということなんです。マザーはこのように言っています。イエスはどのようにして私たちを救ったのかということ。 「私たちの人生、孤独、苦しみ、そして死さえ分かち合うことによって、イエスは私たちを救おうとされたのです。私たちといることによってのみ、イエスは私たちを救われたのです」。そうマザーは言っているのです。神である方が私たちのもとに来て、この苦しみをすべてつぶさに味わわれた。神である方が私たちをそれほどまでに愛してくれた、そこにキリスト教の救いがあるのだとマザーは確信していたのです。これは実際に私が子どものころに体験したことなのですが、学校の校庭で雨上がりなのに子どもたちが飛び出してきていたんですね。校庭は水たまりがあって女の子が転んでしまったんです。男の子たちは「大丈夫だよ」と励ましたのですが、女の子はますます泣きじゃくるんですね。私たち男の子が遠方に暮れていると先生がその女の子の隣にきれいなジャージ姿のまま、パタッと倒れたんです。泥だらけになりながら「大丈夫！一緒に起きよう」と言うと女の子は起き上がったんです。こういうことではないでしょうか。女の子がなぜ泣き止まなかったかということ私たちはキレイな姿のままだったわけで、女の子にすれば「この人たちは私のことをちっともわかってくれない」ということだったんですね。もし神様が天国から「大丈夫だ！私はあなたたちを愛してる」とどんなに言っても、それだけでは人間は納得できない。そこで神様はイエス・キリストを私たちのもとによこされ、私たちの苦しみも味わい尽くしてくださいました。そしてそのイエスの言うことだったら信用できる、立ち上がろうと。それがキリスト教なのだ。マザーは思っていたに違いありません。マザーにしたなら、貧しい人と一緒に苦しむ、相手愛する、相手の痛みを感じる、そこにキリスト教の救いがあるのだと言うのです。普通の社会活動をする人たち、私などもそうなのですがボランティアしている以外はシャワーのあるようなところで快適な生活をしている。ところがマザーはそれは深い態度ではないと言っている。私たち自身も貧しい人たちと同じ生活をし、同じ目線で話しかける。そうでなければ私たち

の活動はキリスト教の救いにはならないと。それで洗濯機も扇風機もない生活を選んだということなのです。普通の社会活動家たちは8時間だけですがマザーたちは24時間すべてを捧げ尽くしていた、そこにキリスト教の救いがあるのだと。「私たちは同じことをするのをゆるされています。貧しい人々のすべての苦しみは贖われなければなりませんし、私たちはその苦しみを分かち合わなければなりません。物質的な貧しさだけでなく、精神的な貧しさも、です」と。さらに「わたしたちの使命は、苦しんでいる人がいれば世界中どこにでも行ってその人と一緒に苦しむことです」。何かをあげるとか、何かをすることかということではないのだと。私たちが一緒にいて、一緒に苦しむ、それこそが私たちの使命なのだということです。それさえできれば、私たちはキリストの光を輝かせることができる。「貧しい人の中に、キリストを見つけなさい」というマザーの言葉です。これはとても難しいですね。マザーが生きていた頃、私を含めボランティアの人たちは一生懸命見つけなければと思っていたのですが、私は一年間ボランティアしていましたが結局何のことかわからなかったんです。最終的に思ったのは貧しい人たちも神様の大切な子どもなのだから、イエス様と思って大切にしましょうというスローガンなのかなと思っていました。でもこれは大変な間違いなんですね。マザーははっきり言っています。貧しいひとたちと思って奉仕するのではなく、貧しい人たちがイエス・キリストだから奉仕するんです。“思って”ではなく“だから”。そのくらいのことを感じることはできず一年間を過ごしました。それが初めて、ああそういうことなのだとわかったのは、2009年神父になってカルカッタに行くことができたとき、針金みたいな体の人たちのお世話をしているとき、“この人はこんなになるまでどんなに苦しい思いをしてきたのだろうか”と思ったんです。そしたら自分自身も悲しくて悲しくて涙が出てきた。そのときにはじめて“ああ、この人の苦しみの中にイエスが確かにいる。この人の苦しみにイエスはずっと寄り添っている、イエスのぬくもりがある”と感じたのです。それが私の大きな転機だったと思います。23歳のときになぜわからなかったかということ、そのときに私が考えていたのは“どうしたら私は貧しい人の中にイエスを見つけることができるだろうか”ということだった。相手の痛みを考えないで“私が私が”とばかり考えていたのです。ところが神父になってカルカッタに戻って心を開いたら、相手の中にイエスがいたんです。ですから、イエスを私たちが見つけたいならば相手に心を開くことから始めなければならない。マザーはこうに言っています。「もし人々が私たちの中にキリストを見るよう望むなら、まず私たちが人々の中にキリストを見なければなりません」。私たちがもし相手の中にキリストを見るならば、私たちの見ている瞳にキリストが映る、そして映ったキリストを相手が見ると考えていいかもしれないです。マザーの瞳には本当に優しい光が浮かんでいるんです。マザーは相手を見ているというより相手の向こう側にいるキリストを見ているに違いないのです。ですから、この信仰が他の奉仕活動と違うところなのですね。

では、どうしたら苦しんでいる人たちを愛することができるのか。これはマザーが遺言状に書いていることです。当時シスターは3000人いましたので、マザーはこの人たちが自分がいなくなってからやっていけるのかと、とても心配していました。そこでA4サイズで4ページくらいの遺言状をしたためたのです。その中の言葉を紹介したいと思います。最初にマザーが好きだったイエスの言葉であり、キリスト教のいちばん大きな特徴とも言うべき2つの掟ですね『「第

一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、私たちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。』（マルコ12：28-31）これこそまさに私たちにとって愛ということ。神様を愛するというのにはある意味で可能なことです、神様はどんなときでも無条件に私たちを愛してくださっていますから、その愛に気づくことさえできれば、私たちは神様を愛することができるのです。普段、当たり前前とやっていることも神様の愛です。それに気づいて神様ありがとうと言うことができれば、愛の始まりで、私たちはいつでもどこでも始めることができるのですが、難しいのは“自分を愛するように隣人を愛しなさい” “まず、自分を愛する” これがいちばん難しいことだと思います。マザーはこの遺言状の中でいちばん強調したのが「自分を愛しなさい」でした。シスターたちはこれができていないのではないかと心配していたのです。それができないと絶対に人を愛することができない。そのことをマザーは繰り返し繰り返し言っています。また、この言葉を紹介したいと思います。「悪魔は人生の痛みや、私たち自身のあやまちを利用しようとしています。イエスが自分を愛しているなんてありえないという考えが、あなたたちに恐びようとしています。そして悲しいことに、その考えはイエスがあなたたちに語りたくて願っていることとまったく反対なのです。」というんですね。“人生のあやまち” というのは、自分の思ったとおりに進まない、“どうせ私なんか”、と思い自暴自棄になってしまうことがありますね。神様が見捨てる前に自分で自分を見捨ててしまう。そういうことがありがちなんですね。なぜそうしてしまうのか。“もうダメなんだ” “私なんて”、これはその前に“こんなはずでなかった” という言葉が隠れている。それはどういうことかということ、“私はもっと優れている人間だ” という傲慢な気持ちが隠れているということなのです。私たちはほとんどの場合、実際の自分よりもちょっとだけいい自分を本当の自分だと思い込んでいることがあると思います。そして何か大きな失敗をして不完全で無力な自分の姿が露になると愕然として落ち込むのです。人から実際の姿を指摘されたときにもムキになって否定する。それも同じ心の動きだと思います。ありのままの自分を受け入れることに耐えられない。私はよく写真を撮るのですが、撮った写真をみて女性に怒られることがよくあります。“私はこんなに老けていないわ。あなたの腕が悪いのよ”（笑）。自分はもうちょっと若いと思っているんです。しかし写真ですから。厳しく現実を突き付けられると受け入れず、相手のせいにするという態度をとる（笑）。まあ、人間というのは真実を突き付けられると怒りがちです。しかし、そのように自分を実際以上にすることはないのだとマザーは言っています。「自分は愛に値しないと思っているときですら、イエスはあなたたちを愛しているのです。もし他の人々から受け入れられないときも、自分で自分を受け入れられないときでも、イエスはいつでもあなたたちを受け入れるのです。」そんなに背伸びをする必要はありません。ありのままの弱くて不完全なあなたを愛しているのだから、その愛を信じなさい。もうダメだということは絶対にないのだということです。次の言葉です。「イエスから愛されるために自分と違ったものになる必要はないのですよ。信じなさい、あなたたちはイエスにとってかけがえのないものなのです。」さらに「もし神の前でありのままの自分を受け入れるなら、どんな称賛もその人を思いよらせることはできないし、どんな悪口もその人を傷つけることはできません。」これは本当にマザーの人生の極意だと思います。これさえ本当にできれば何も惧れるものはありま

せん。人間関係でも99.9%大丈夫です。神様の前でありのままの弱くて不完全なままの自分をそれでも神様から受け入れられた自分とすることさえできれば、傲慢になって踏くことはない。そしてまた絶体絶命の窮地に陥ったとしても自分を見放して自暴自棄になることもない。まさにマザー・テレサ流の人生の極意がここにあると思います。ありのままの自分を受け入れるということを“それは子どもたちに言わないほうがいい”という人がいます。そうではない、まったく逆だと思います。ありのままを受け入れること、勇気をもって自分の欠点や弱さを認めることでずから、自分のことを優れていると思込む人には進歩はありません。自分の弱さ、欠点を受け止められると、そこからどうするかという進歩・成長が始まるのです。神様から愛されている私として受け入れられたときに本当の成長がそこから始まるのだということです。

あなたたちの存在そのものが、光となるように。自分自身の弱さや不完全さを受け入れ、同じように私たちの隣人をも神様から愛されているのだという思いで奉仕する人がキリストの愛の光で輝くのだということだと思います。私たちが何かを運ぶのではなく、存在そのものによってキリストの光を輝かせる。そこから始める。それがマザー・テレサに倣う奉仕の精神だと思います。

1952年「死を待つ人の家」開設



フロアからの質問・意見

質問者：被災した人たちの中には、傲慢ではなく、子どもや親を亡くしたのは自分のせいではないかと、自分を責めている人がたくさんいらっしゃいます。そういう方たちに、「あなたたちは愛されているんだよ」と接していかねばならないと思うのですが、いかがでしょうか。

神父：震災に関してですね、なぜこんなことが起きたのか、誰のせいなのかと考えてしまう。わかるのです。私たちは自分の無力さということに直面することを求められているような気がするのです。人間にはできることとできないことがあります、その人間のありのままの弱さを認めるように・・・津波がそういう意味だったとは言いませんが、私たちが津波から何かを学ぶことができるのであれば、本当にこれまでの自分たちの生き方をもう一度振り返って考え直してみる機会だったのではないかとということがひとつの答えかと思います。

質問者：鹿児島支部の松村と申します。今、神父様のお話を伺いながら、まず第一に感じたことは神父様は幸せな方だなと思いました。マザー・テレサから“神父におんななさい”とのお話を受けたときに、マリア様の受胎告知のように素直に受けられたのを神父様も幸いな方なのだなと思いました。そして、神父様のお話の中に“自分を愛しなさい”とは自分が失敗したときとか自分の欠点に気づいたときとか、自分の思い通りにならなかったときなど誰しも体験することなのですが、打ちのめされたような気持ちになると思うのですが、そういうとき神父様は現在、どのようになさっているのかなと、ちょっとお話いただければと思います。

神父：神父になってすぐ年配の神父さんに“苦しみのおときこそ成長のおときだ”と言われたので、それをずっと神父生活の指針として心に刻んでおります。苦しみというのはどこから生まれてくるかということ、落ちたときに生まれるんですね。私たちが自分を高いところに置いていると、それが突き落とされたときにショックを受ける。それが心の痛みですね。だからもう一度立ち上がることができることによってそこからもう一度立ち上がっていけるかどうか、それが成長ということと思っています。

質問者：ここ1週間ほど迷っていたことがあるんですね。ある研究会で“家族の中でいちばん重要な人は誰か”というアンケートのようなものがありまして、みなさんは母親と書かれているみたいなのですが、私は認知症の母を抱えており、素直にそうは思えない・・・どのように考えたらいいか迷ってしまっていて・・・

神父：キリスト教徒にありがちなのですが、神様を愛そうとするのだけれど、神様に愛される体験がないんですね。神様を愛そう愛そうとするあまり、神様に愛される時間を充分にとっていないということが起こりがちだと言われておりますね。愛とはお互いに愛し合う、そのときにはじめて喜びや輝き、人を生かす力が生まれてくるのだと思います。ですから祈りの中で自分がどれだけ神様から愛されているのか、そのことを感謝することが大事ではないでしょうか。今日は時間の関係でお話できなかったことも、先頃出しました「祈りへの旅立ち」という本の中に詳しく書かれております。通常の伝記とは違った視点で書きましたので、どうぞ参考にいただければと思います。

パネルディスカッション「大震災を乗り越え復興に向かって」

座長 佐藤真樹子（光ヶ丘スベルマン病院看護部長）
パネリスト 鈴木 栄子（看護師 岩手県在住）
庄司マリーン（カトリック元寺小路教会信徒）
東谷 光子（保健師 福島県在住）



佐藤：司会を務めます佐藤と申します。どうぞよろしくお願いいたします。JCN仙台支部では、この大会を「大震災を乗り越え復興に向かって」というメインテーマを掲げ、「生かされているいのちの分かち合い」について3人の方からお話をいただきます。

鈴木：大船渡から参りました鈴木と申します。今日はこのように場にお招きいただきありがとうございます。2年半以上も前のことでちょっと忘れてしまったこともあります。何かお役に立つことがあればとお話させていただきます。どうぞ聞いてください。今の画面は震災前の大槌病院です。とてもものどかなところで病院の前が大槌川というところで、渡り鳥なども多く、私はとても癒されていました。

みなさんご存じのように2011年3月11日、14時46分、勤務中にまずすごい地鳴りですね。その地鳴りを聞いたときに、これはただ事ではないと思いました。そして今までに経験したことのない大きなブランコに乗っているような揺れを感じました。立っていることができなくて机の下に隠れたのですが、病棟がどうなっているのかと3階まで這って行ったのを覚えています。幸い1、2階の外来診療は終了していましたが、3階の病棟には53名の患者さんが入院していました。職員は看護師35名を含め54名勤務していました。



（写真） 這うようにして3階の病棟に上がっていったら看護師詰め所はこのような状態でした。地震発生後に院内はすぐ停電しましたが、自家発電は作動しました。6分後に大津波警報が発令されましたが、入院患者を1カ所に集合させ避難体制にしました。避難警報の後も寝たきりの患者さんも可能であれば車椅子に寄せ、とても緊迫した状況の中、患者さんたちも騒ぐことなくおりました。

た。これは8分後、自家発電作動中の様子を、人工呼吸器をつけている患者さんたちがおりましたので、地震の間中、必死で人工呼吸器とベッドを押さえていた姿です。38分後、すごい津波が病院に押し寄せました。3階の病室で津波をみたのですが、すごい土煙りが空に舞い上がって家が何軒も並んで押し寄せてくるんですね、津波が来てからはライフラインが途絶えました。



(写真) これは39分後の状況ですが、もうそこが海のようにした。40分後ですが、花を植えていたところに津波が押し寄せ、こんなふうに家々が押し寄せてきた状況です。



また、これは押し寄せた家屋の勢いで壊れた病室です。サッシはめちゃくちゃでしたし、ベッドがあちこち動き回りました。これは竜巻のようなすごい気流が発生しまして、これは経験した方ではないとわからないと思うのですが、ほっぺたが裂けそうになるぐらいの気流でした。みんなで叫び声をあげ、しがみつきました。津波が3階病棟の階段まで差し迫ってきたので、屋上に避難しようということで、みんなで寝たきりの患者さんをシーツや毛布に包んで狭い階段ですが、屋上まで上げました。



(写真) これは屋上避難後の様子です。強風と寒さが身に染みましました。みなさん寒くて寒くて毛布を何枚かけてもおさまらない状態でした。

(写真) 15時51分の津波の様子です。ガレキだらけで、船もあがってきました。



津波の次に怖かったのが火災です。病院の近くにある蓮常寺というお寺で火災が発生しました。この蓮常寺は住民の避難場所でもありましたが、そこが火災になったため近くのお墓のほうの山にみんな逃げる様子が屋上から見えました。寝たきりの患者さんは屋上の洗濯物を干すサンルームへ避難させ、ぎちぎち状態で寝ていました。物干し竿をかけるフックがありましたので点滴をかけるのにとっても助かりました。人工呼吸器をつけた患者さんもみんなで酸素ポンペをかけバッグを押し続けていました。



(写真) この後ろ向きの男性ですが、車ごと津波にのまれたんですが、フロントガラスが割れ、そこからはい上がってきて流れてきた家につかまって、その家が病院の中庭に入ってきました助かった人でした。職員がみんなシーツをつないで投げて、彼に届き、みんなで助けた人でした。ブルブル震えていましたが、本当に奇跡の生還の方だと思います。暗くなるとともに火

災は激しくなり、とにかく爆発炎上が続きました。



燃え続ける大槌の町です。蓮常寺は焼け落ちてしまいました。避難した人たちはどうなったのかなあと、みんなで心配しました。この蓮常寺の前は町並みが広がっていたのですが、全部なくなっていました。朝の4時の様子ですが一晩、燃え続けていました。大槌病院はボイラーとかさまざまな熱源に重油を使っていました。ボイラーマンがちょうど満タンにしたばかりだったとボツン



と言ひまして、まあ火がつけば私たちも命はないのかなと不安にかられましたが誰も騒ぐことなく、夜が明けるのを待ちました。

12日です。夜明けとともにサンルームの患者さんを3階の病室に戻しました。ベッドではなくマットレスに直接寝せて看護しました。それから屋上には「SOS」と描き救助を求めました。それから2階が給食室だったので、そこに男性たちが行って泥だらけのレトルト粥パックを探しあてて患者さんと職員で分けましたが、一口ずつ食べるとなくなってしまいました。それから救助

が来るまで何とか頑張ろうと、院長先生を中心に励まし合いながら頑張りました。看護師はそれぞれ役割をつくりまして簡易トイレを作り男女それぞれに設置しました。



3月12日早朝 一本の道を通している



3月12日14:11 自衛隊のヘリコプター到着

12日の早朝の写真です。重機が入ってきました。今まで道はどこかわからなかったんですが、重機が一本の道を通しました。これはまず遺体を探すのだそうです。そのための道です。この写真は朝方の大槌の廃墟となった姿です。午後になって自衛隊のヘリコプターが着陸しましたが、私たちが一生懸命に手を振っても全然応えてはくれませんでしたし、救助のヘリではありませんでした。13日の朝方です。ここまで病院に閉じ込められたままです。病室で患者を見守りながら救助を待つ様子です。どこかの新聞社の方が来て撮っていったようです、いつ撮っていったのかわかりませんが、この頃には病院の近くに住む職員がガレキをよじ登って沢の水でご飯を炊いたり、温かいお湯をポットに入れて持ってきてくれたりしたので何とか食べることはできるようになりましたが、ポットのお湯を注ぐとゴミがいっぱい入っていました。でも、おいしいし温かくて飲みました。昼になると、歩ける患者さんは退院し、自宅や避難所に行ってもらいました。昼に自衛隊から水、パン、ろうそく、ホッカイロ、毛布などの物資が届きました。老健施設へ患者さんの受け入れ依頼に主に男性職員に行ってもらいました。それから新聞社の取材が来ました。職員の生存者の名前を教えてくださいということだったので私が看護課の職員の名前を書きまして、事務長さんがその他の職員の名前を書きました。それがラジオから放送されたりしたと後から聞きました。それとラジオからは3日以内に震度7の余震が来ると流れ、このままでは病院が崩壊の恐れがあるということで、このまま救助を待つか、逃げるかということを検討し、看護師は“逃げよう、逃げよう”と、声を大にして叫びました。



(写真)そして1.5キロ離れたところにある大槌高校に患者さん28人を、それぞれ車椅子1台を3人がかりで避難しました。3階にいたので階段を使って車椅子を使って、自衛隊の方に道を作ってもらってみんなで大槌高校まで運んでいきました。これも新聞に掲載された写真です。大槌高校ではライフラインが途絶えた中、高校生がたくさんろうそくをつけて迎えてくれました。避難者は1000人を超えていました。2つの教室をいただきまして、寝たきりの患者28名の看護と外来看護ですね、急患や具合の悪くなった人の看護にあたりました。もうひとつ教室をいただき薬や注射器などいろいろな物資を置きまして、診療にあたりました。病院にいた

ときは自分たちの患者の看護にあたっていたのですが、高校に避難してからはすごく忙しい状況になりました。さすがにスタッフは危険から逃れ安堵の表情でした。食事はレトルト粥をいただいてストーブで温めて患者さんに食べさせました。職員は物資をもらうために普通に避難者と同じように並んでおにぎりをいただき食べました。患者さんには看護師が2人1組となって患者さんを抱き抱えて誤飲させないようにゆっくり摂取させました。それまで食事を拒否する人も認知症でさっぱり食べなかった人もおいしそうに茶碗一杯食べてくれ、会話も弾み、看護師が抱えたり寄り添って話すということがこんなにも患者さんを回復させるのだなと痛感した場面でした。このあたりから体調を崩す看護師が出てきたのでシフトから外し寝かせていました。

大槌高校の様子ですが、生徒たちはボランティアで毎日通ってきて、自ら働いておりました。(写真)



3月14日ですが、もう職員も家のことが心配で早く患者さんを施設や病院に搬送しなければ職員はどうにも身動きがとれないものですから、自分たちで患者の受け入れ先を交渉して回ったり、被災した病院に出向いて使える材料を何回も運びました。私もアパートに行きガレキをよじ登って中に入ってみたら、ご遺体がありました。病院には自衛隊の人が何人かいましたので、そこに行き私のアパートにあったご遺体を運んでもらうようお願いしました。少ない医材での救護活動は続きました。喘息、腰痛、怪我、下痢、嘔吐・・・私たちは夜中まで働きました。院長先生にも夜中まで起こして働いてもらいました。他の避難所からも要請があり往診にも行きました。破水の疑いの妊婦や、一度津波に吞まれたが母親が救助した3カ月のぐったりした乳児を救急搬送しました。救急搬送は岩手県の県立釜石病院に一旦搬送して、その後振り分けてもらうというようにしました。そのお母さんはとても可哀想で、その乳児を引っ張って助けたのですが、自分の目の前で5歳のお兄ちゃんを吞まれてしまったということをととても悔やんでいて、乳児は汚い水を飲んでいるわけですので緊急搬送いたしました。



3月15日、やっと千葉県DMA Tが来まして、トリアージ搬送ができました。だいたいが黄色なのですが、要治療の分と療養型の病院でもいい患者さんとを振り分けました。そして

午後になって大阪の救急隊が救急車を19台引き連れてピストン搬送を行って最後の患者さんを届け、帰ってきたのが夜の10時過ぎでした。

3月16日です。やっと入院患者さんは他病院や他施設に移動しましたが、外来での救護活動や避難所での活動は続いておりました。私たちは家に帰らないということで、救護活動を岩手医大の医師と地元の私残ってもいいよという看護師と、兵庫県の医師、看護師に引き継ぎ、職員は念願の自宅に戻るために一時解散しました。6日間のことでしたが、職員も安堵の表情でした。私も自宅に戻りましたら、母親の遺体がありました。納棺のときでした。私も母親がどうなっているのかわからなかったし、母親の家も流されてなくなっていました。家族から大船渡での被災や避難の様子を聞き、こちらも大変だったなあと思いました。やはり自分が何の力にもなれなかったと悔いることとなりました。



1ヶ月半して、大槌病院では外来診療をこの公民館で開始しようです。ここも浸水したんですが、みんなで掃除して外来診療を始めたようです。3ヶ月半後には仮設診療所ができあがって、町内開業医と連携して診療を現在も行っています。

東日本大震災を体験し、被災者として医療に携わることの限界ということも感じました。家族のことが心配で黙って帰ってしまった職員もいましたし、大槌の町が津波で消え、自分の家が流されたということが見えた職員は家族の安否もわからず泣き叫んでいました。やはり3月11日の災害発生というのは多くの命を振り分けたなあと思います。早番、当直明けで帰宅した職員が亡くなりました。

とにかく看護師はよく働きました。体調を崩す職員もいましたが、命を守ることを優先にどんどん意見もしました。それから働くシフトもすぐ組んで、とにかく看護という団体は組織化されるのが早いと思いました。文句を言ってもすぐ団結して働くことができました。別の病院に移動した職員は気分の落ち込みが進んだようです。内陸の病院へ移動した私も大槌病院復興の一助となれず、私の頭の中では時間が止まったままです。

今回、災害時の看護ということを考えてみて、被災した病院の中とか避難所での生活はとにかく水や電気が断たれて排水路が不備でした。とにかく細かく掃除すること、病気の蔓延に関して敏感になること、手洗いやうがい呼びかけました。大槌高校でしたので放送を使って何回も呼びかけました。それから病院から持ってきた消毒剤をトイレに置いて、トイレを流すのはたまたまプールに水があったので助かりました。水が援助されてくるまでは消毒剤を使うよう啓蒙しました。やっぱり、とにかく被災している方たちは心も体もボロボロで免疫力が下がっているので、これ以上悪くならないように医療しながら配慮することが必要なのだなと感じました。考えますと、やはりナイチンゲールの看護覚書のとおりだなと痛感しました。とにかく一つひとつが当て

はまります。電気がつかなくても光は入ります。なるべく温かくしようと思えばできます。やはり私たち看護師の役割は「生命力の消耗を最小にするよう整えること」だと痛感いたしました。



(写真) 震災発生から2年7ヶ月です。大切な日常が徐々に戻ってきました。三陸鉄道も一部ですが再開しました。なぜだか大槌からこの三陸鉄道で大船渡に帰ってきたことのある私は、三陸鉄道が懐かしく、朝6時35分の列車をデジカメで撮影に行くんですが、いつ見てもいいなと思います。

(写真) これは私の姪っ子ですが、私が沐浴しているところです。こういう震災を知らない子供たちに経験者がどんなに大変な思いをしたかと伝えていくことが役割なのかなと今、思っています。ありがとうございました。



佐藤：ありがとうございました。では庄司さんお願いいたします。

庄司：皆さまこんにちは、私は庄司マリーンと申します。フィリピンから来ました。



日本に来て38年になります。今、主人と暮らしています。息子夫婦とは今、別に住んでいます。10ヶ月になる孫もいます。男の子です。今は仙台青葉区の木町通りに住んでいます。今日は私の地震体験をお話する前に改めてオタワ愛徳修道院の皆様にお礼と感謝を申し上げます。実は私たちフィリピン人と外国人はオタワ修道院ととても関係が深いのです。なぜなら今から30年前のことですけど、私たちフィリピン人は10年間もオタワ修道院にお世話になったことがありました。修道院の礼拝堂を英語のミサ

のために使わせていただいたことがありました。私たち外国人と日本人を含め交流の場を与えてくれたことは私たちにとってとても大切なことでした。私たちにいろんな事をお世話してくれました。あのときは私たち、いろいろなご迷惑をかけました。今日はこの場を借りて改めてお詫び申し上げます。そして改めて心から感謝いたします。

まず、私の災害体験をお話しますが、正直言ってこの体験は心の中だけに仕舞っておきたいと思うことです。なぜならば思い出すたびに苦しくて悲しくてなりません。今日は皆さまのために頑張ってお話したいと思います。私の地震体験はこれが3回になります。宮城県沖地震が最初の体験でした。そのときは死者はあまりいませんでしたが、建物はけっこう倒れました。このとき私たち家族は宮町の5階建のアパートの3階に住んでいました。地震が起きたときは私しかいませんでした。ちょうど私はお風呂からあがったばかりで、頭を拭いているときすごい揺れが起き

ました。すぐにパジャマを着て、あまりの揺れで裸足で玄関のドアを開け、ハイスピードで下に降りました。下に着いたら体が震えていました。このときとても怖かったです。そしていちばん心配だったのが散歩に出掛けたじいちゃんと2歳の息子でした。しばらく下にいましたら、まもなくじいちゃんと息子が帰ってきて、わたしは泣きました。二人とも無事であることがとても嬉しかったです。この地震はとても大変でした。家の中の物はほとんど倒れました。今、思うとあのときもし家の中にいたら、死んだかもしれません。地震がおさまった後に電気ガス水道が止まりました。このとき地震のために備えるものが何もありませんでした。町に出て買いに行きましたが、ほとんど売り切れてました。生活はとても不便でした。そして何よりも30年過ぎててもトラウマは消えません。そして今回の3.11が来る前に1週間くらい、とても不思議な体験をしました。35年前の地震の音が毎日聞こえました。そして毎日同じ夢を見ました。それが水のことでした。流されました。この夢は毎日でした。水が玄関から入って溢れ出してまるでタイタニックのような夢でした。いちばん不思議でたまらなかったのは、私の死んだお母さんが夢の中で私を避難させる姿をはっきり見た。今思えば地震の後のことは、私の夢の中の場面にそっくりでした。お母さんが死んでから1回も夢をみたことがないです。けどこの夢の中はお母さんが私に言ったことを今も思い出す。「おいでおいで、そこは危ないよ」と、言われました。お母さんが立っている場所は、私の流された家の玄関でした。家は丸ごと流されました。玄関のコンクリートは残され、夢で見た玄関とそっくりでした。3.11の2日前に国際交流協会に行っていました。この日はとても気持ち悪かったです。あの地震の音が朝から聞こえました。この日は何となく地震が来るかなという気持ちがしました。この日は、確かに震度5の地震が来ました。私はこの日、揺れながらお祈りしました。地震終わった後、みんなが「ねえマリン、何を言っているの」と言いました。私はさらに大きな地震が来るよと国際交流協会の会長さんに言いました。“何でわかるの?”と聞かれました。「あの前の地震のときの音がどこからか聞こえました。何となく海の下からゴングンしてくるような音でした」と言うと、会長から「そんな事言わないで」と言われました。2日後に地震は本当に来ました。3.11はとても忘れられない日でした。地震が来たときは二日町にいました。ワンルームを借りて、そこでは子どもたちに英語を教えたり、いろいろな仕事をしていました。私は交際交流協会の相談員として務めてもいます。学校にも外国人の子どもたちのサポートをしています。警察、区役所、市役所関係、海上保安官関係の通訳もお手伝いしています。お蔭様でこのような仕事のお陰でここに立つことができました。もしもこの仕事が無ければ今頃、あの世だったかもしれません。あのとき、金曜日で二日町にいたので、ちょうどフィリピン人の友達とお昼を食べ、あの頃はまだ寒く、コタツでお茶をしていました。二日町の部屋は6階建てで私たちは5階にいました。このアパートは約25年前に建てられ狭い部屋でしたが、玄関まで物を置いていました。友達が「何かがあったときに大変だから玄関には物を置かないほうがいいよ」と言ったとたん大きな揺れがきました。私と友達のローラは外に出ました。階段は鉄製で壁のない階段だったので外は丸見えでした。建物が壊れるんじゃないかと思うほど揺れ、お祈りしながら階段を下りました。でも揺れ続けるのでなかなか下りられなかった。命がけでした。下に着いてさらに大きな揺れが何度も来ました。建物の中からいっぱい人が出てきてみんなで泣きました。道路も揺れました。このアパートの付近にはたくさんフィリピン人が住んでいました。道路の真ん中で抱き合って泣きました。とても寒かったのでお互いに励ましながら

祈りました。揺れがおさまってから部屋に戻ると扉はなかなか開きませんでした。すべての物が氾濫し、揺れてすぐに出たことで私たちは救われたと思いました。地震の終わった後、すべてのライフラインが止まり、アパートの人たちと一緒に下でろうそくをつけながらわずかなパンとおにぎりで夜を過ごしました。ある人たちが分けてくれ「苦しいときは国境はないのよ」と言ってくれました。地震のおかげでいろいろなことを学びました。分かち合いということの意味がよくわかりました。主人と子どもたちと連絡がつかないまま2日間が過ぎました。3日後に主人から電話が来て、1時間後に主人や子どもたちと会えたときはすごく嬉しかったです。家族全員が無事でした。そして家のことを話してくれましたが、とてもショックでした。いちばん悲しいのが隣近所の方々がいっぱい津波で流され亡くなったことです。主人はとても神経質な人です。会えないとき、主人は家のことを一生懸命片付けているだろうと思っていました。津波のことはよくわからなかったです。ある日本人の方がケータイの電池がまだあるとき「七北田川がすごい逆流し、仙台新港も10mの津波があったのよ」と教えてくれましたが、津波の強さなんて私にはよくわからなかったです。友達が「蒲生の家、大丈夫？」と、言われてもなぜか絶対大丈夫と思っていた。なぜなら仙台新港、若林のことはニュースで聞いたが、もしかして蒲生は大丈夫と勝手に思い込んだ。主人が「家を流された」と聞かせてくれたときには、とても悲しくて泣きました。誰よりも主人が愛していた家が流されなくなりました。

この家は300万円かけてリフォームしたばかりでした。庭から屋根までキレイにしたんです。主人は老後のために準備しました。主人は帰ってくると庭の花に水をやり、きれいに掃除する毎日でした。主人の楽しみがなくなってしまったのは本当に悲しかったです。



この2年間はとても辛く、主人は時々家のことを思い出し、涙ながらに私に語るのがいつも辛いです。家のことも悲しいですが、いちばん悲しいのは私たちの隣近所の方々が亡くなったことです。そして無事に助かった方々の3日間の寒く辛く体験が悲しいです。後ろの家の旦那さんはゲートボールから帰られなくなり流されました。足が不自由で早く歩けなかった。奥さんは兄弟が迎えに来て助かったけど、奥さんは自分を責めています。向かいの鈴木さんは50歳過ぎてやっと嫁をもらったが、その奥さんが津波に流されました。向かいの旦那さんも家族を中野小学校に避難させた後に、大事な書類をとろうとまた家に戻り流されました。別の親子もお父さんと30代の息子と一緒に流されました。蒲生地区では310人が亡くなりました。まだ何人かは見つかっていません。私、この不幸の後、まもなく国際交流協会の活動をしました。NHKに私の電話が載せられ、それから毎日数知れないほどの電話がありました。外国からも来ました。いちばん多かった内容は家族に連絡してほしい、2番に多いのは原発のことです。この電話の他には国際交流協会のスタッフと私たちは避難所を回って外国人がいるかどうか確かめていきました。そしてこの方々の願いと私たちに何ができるかを話しました。私たちもあちこち回り同じ国の人に配ってあげました。避難所にもフィリピン人コミュニティと一緒に炊き出しをしました。あまりに忙しいので、3.11のときは自分が被災者だということを忘れました。どうもありがとうございました。

佐藤：ありがとうございました。では次に東谷光子さん、よろしくお願いします。

東谷：福島から参りました東谷です。

あまりまとまっていないので皆さんに伝わるかどうか不安なのですがお話しします。よろしくお願いします。本当に穏やかな山間地帯で暮らしてきた人々が原発事故に見舞われ、警戒区域、それから緊急時の避難準備区域指定を国から受けたことによって避難を転々としたということがありました。そして仮設や借り上げアパートに落ち着いて、今現在2年7ヶ月経ちましたが、まだ帰られないような状況にあります。



20キロ圏内は国のほうで除染がやっと終わったところなので、20キロ圏内は今年8月から3ヶ月間自宅で生活できるようになりました。

田村市は合併したことによって4万くらいの人口を抱えていたんですが、避難指示は都路町だけなんです。人口が3000人余りの小さな町で、浜沿いの山を越えて中通り地区というところに位置していますので、高齢化率も高い地震にも強い山奥のところだったんですが、ここもだったということはとても大変な出来事だったのです。福島というのは、浜通り、中通り、会津地方と3つに分かれています。現在、テレビでやっている新島八重さんが生まれたところは会津地方で、私が今住んでいるところは山の中の地方になります。このような高齢社会の中で起きたことです。そして原発事故からは、いちばん近い方で15キロ、遠い田村市で46キロ。この中の都路町が避難指示区域となって、避難することになりました。放射線量というのは本当に見えないし、匂いもわからないので、地震による被害がなかったような田村市でした。ライフラインはまったく損傷がありません。全壊というか土台が崩れたというようなのを判断するのだと思うのですが、土台がずれた場合には建物がもたないだろうということで全壊の判断をします。全壊が19で、半壊が196、ガラス窓が壊れたとかの一部損壊は4,137。ドアが開かなくなったなどというのも含めると少し多くなりますが、ほとんど地震の影響はありませんでした。役所では浜通りからの避難者を受け入れていました。病院から、特養ホームからの避難者がどんどん中通りに流れて参りましたので、本当に交通整理だけで大変な状況になっていました。原発事故は避難の次の日からです。3月12日、浜通りからの避難を受け入れを始めたので大変な状況になって、炊き出しをしたり体育館に受け入れをしたり、病院のトイレを作ったりしました。夕方になって、ニュースしか情報がありませんでしたので、ニュースで30キロ圏内に避難指示が出されたということを知りましたので、役所は大慌てで都路町の方々に避難指示を出しました。994世帯3000人余りの小さな町なんです。点在している方々を集めて避難するというのは大変でしたが、7時くらいから放送し各公民館に集め、中央あたりまで行けるところまで向かいました。大熊、富岡、双葉町の避難者がたくさんいましたので、やっと見つけたところにとりあえず落ち着いてもらいました。



（写真）この学校は廃校になったところなのですが、まだ新しくて、

3週間ほど自動車会社の倉庫を借りまして、ちょうど震災から4日目です。自動車会社の倉庫に浜通りの津波で避難された方、それから都路の原発事故避難者2000人ほど集まりまして、ここで3週間ほど生活を余儀なくされました。原発事故というだけで、福島に



入るトラックもストップしました。



（写真）ここは役所です。地震では何ともなかったです。何も無い中で被災支援を続けてきました。

この自然が美しい風景で、何も変わらないのですが放射能という風評被害が福島全体を包んでいます。静かに放射能汚染が福島という県民を不安にさせたということで、県民全員に今後30年間、健康審査するということになっていまして、今年は3回目の計画を福島医大に事務局がありますので会場を設け、そこで対処することになっています。それから住民検診に上乗せし健康審査をすることをこれからずっと続けるということで各個人の健康ファイルが郵便で送られています。そして心の健康調査ということで、心がどのようになっているか、どのような不安があるのか、放射線の場合には命からがらではなかったのに、「もどに戻れない」「職場が撤退した」「これから先どうやって暮らすか」などの大きな課題が残されていますので、福島に残るのか、放射線の無いところで暮らすのか、子どもたちを抱える世帯と高齢者世帯では全然違っていきます。どうするかという課題が突き付けられて、ここで意見を出し決めるところから始まるような形になっています。そしてなかなか決めかねないというか、どうしようというのがズルズルときて、これからもたくさんの時間が必要だと思います。原発からわずかな距離なんですけど特に線量が低いのに、それでも福島に避難したり、ちょっと見ると福島の美術館の隣あたりに仮設があったり、昔あった国の機関のあたりにあったり、ひっそりとしているのですがこうした状況はこれからも続くと思われま

す。田村市は、これをモデルにして避難から帰還した田村市ということ进行全面に出したいという方向に現在あるのですが、懇談会の中では親御さんたちから、このような状態では子どもたちを戻せないという意見が出されたりしています。たくさんの県外の方から除染の作業員が派遣されています。県内外から復興のための支援NPOの団体が入っております。壊れたコミュニティを再開したいと部落の集まりの中にいっしょに入り住民とともに歩む支援の仕方を今、協議しながら活動を開始したばかりです。

佐藤：ありがとうございました。3人の方々はそれぞれに大変な思いをされながらお話をくださいましたが、皆さまの中でご質問のある方どうぞ……。まだいらっしゃらないようなのでまずは私から鈴木さんになんですけれども、震災のときはたまたま師長会議中で揺れながら、とにかく病棟に戻ったんですが、誰も写真は撮れなかったんですね。鈴木さんはどのような状況で写真が撮れたのか伺いたいのですが？

鈴木：私は写真は撮っていません。私の部屋は2階でしたのでとにかく病室にかけ上がっていったので、ケータイもすべての財産を失いました。だけれどもこの津波のことをどのようにお伝えしたらいいかと誰か写真撮ってないかなと聞きましたら、検査の技師長さんが男性なのですが、全然手伝わないで、撮影しているということがわかりまして（笑）、それも一役だなと思っております。CDに焼きつけてくれたので私もいただいて使わせてもらっているんです。実際に津波が来たとき、私も患者が最後まで避難するまで3階の病室のほうにいましたので、屋上での津波の様子というのは見てなくて、津波は見る人見る人がそれぞれの視覚で、感情、感覚をもって見ているのだとよくわかりました。

佐藤：ありがとうございます。本当にあれから何か起きたときに、写真は大事なんだと思います。3人の中でもう少しお話ししたいという方はいらっしゃいませんか？あ、会場からご質問があるようですね、お願いします。

質問者A：札幌から参りました。震災体験の後、地域の若者で看護師になりたいという人は増えましたか？それとも反対に別の仕事に就きたいという人が増えたのか、どうでしょう。

鈴木：やはり、震災を経験したり、いろんな事を見たりしてますのでね。学生たちは案外これまでは学校を卒業して出て行ったんですが、地元に残って被災者の役に立ちたいという学生が増えたとも聞いております。お医者さんのほうも被災地にボランティアを経験して被災地に残るといふ人たちも増えていると聞いております。

佐藤：ありがとうございます。他の方、お願いいたします。

質問者B：庄司マリーンさんへ伺いたいのですが、2回の地震体験をなさってるということで、1回目は昭和52年の宮城県沖地震で私も体験しているんですが、マリーンさんはたまたまお友達と別の場所におられ、ご主人とご家族は流されたのですか？

庄司：いえ、主人は元気で生きています。

質問者B：あ、よかったです。愛徳修道会からずいぶん助けられたというお話でしたが、そういうときは修道会が大きな力になって一般の方とはどうだったんですか。

庄司：修道会にはずいぶん助けられました。一般の方ともけっこう交流がありました。なぜという地震の後、フィリピンコミュニティ宮城を作り、気仙沼、石巻、南三陸、岩手など各地と連絡をして、その日本人の方々とも触れ合いました。

質問者B：日本人とも触れ合って孤立はされなかったんですね。これからどうぞ頑張ってください。

佐藤：ありがとうございます。その他の方どうぞ。

質問者C：マリーンさんのお話少し付け加えさせていただきます。マリーンさんはご自分の家が流されたにもかかわらず、彼女は困っている人を助けるために修道院に連れてきて一生懸命お世話をしていたんですね。それはものすごい事だと思うのです。自分のことをいっばいしなければならぬにもかかわらず活動している姿はみごとだとそう思いました。そのことを付け加えさせていただきます。（拍手）鈴木さんも看護師として患者さんを一人も亡くなるようなことがなく、みんなで力を合わせてやったということ、すごく感動していました。たくさんの痛みを味わいながら看護師だからとチームワークで頑張ったのを聞いてすごく嬉しかったのですが、お母様のお出棺のときどんなに辛かったかと思うんですね。でもそういう中であつても分かち合ってくれたこと感謝いたします。ありがとうございます。（拍手）

質問者D：青森の弘前市の病院で看護師をしております。鈴木さんのお話を聞いて同じ看護師として本当に看護師って強いんだと改めて実感させていただきました。そして心がくじけそうになることも多いのですが、すごく勇気をもらった気がします。ひとつお聞きしたいのが、看護師2人で患者さんにあたたかい食事を食べさせたとのこと、そのときの患者さんたちの様子や看護師自身の気持ちなど、もう少し詳しく教えていただければと思います。お願いします。

鈴木：大槌高校に行って、看護師全員でした事は食事介助とおむつ交換でした。ベッドがなくマットしかないから一人は抱っこするわけです。もう一人はその前に入って介助するんですが、今まで点滴しかやっていない患者さんもおかまいなしに、点滴も少ないですからね。みんなで一膳のお粥を「この人は食べないかもしれないけど、まずやってみようか」と全員にやってみたら食べたりしたんですよ。看護師も普段業務で忙しくてお話しなんかできなかったんですが、「昔は何やってたの？」とかいろいろ話かけたり、その人に興味を持って話すことで仲良くなったり、いろいろありました。看護師自身もいろいろやりがいがあったんじゃないかと思います。唯一、病院内で大声で騒ぐ患者さんがいたんですが、施設に搬送するときに「行きたくない、大槌高校がいい」と泣いたというのを聞きまして、やっぱり避難所だけれど、患者さんと看護師が同じ被災者としての一体感というんですかね、看護師としてというより同じ被災者として手を差し伸べているといいですか、気持ち的にはとても力になったのではないかと思います。

質問者D：ありがとうございます。今、看護の科学的な根拠とかを求められている時代なんですが、こういうお話を聞くと科学の力を超えた何かがあると、とても励みになります。ありがとうございます。（拍手）

佐藤：ありがとうございます。その他にありますか？

質問者E：貴重なお話ありがとうございました。私は特養老人ホームで看護師をしています。なかなか人材が少ない業界で、どうしても最近の大きな災害のために防災訓練に力を入れているんですが、どうしたらいいんだろうと思うのですが、私などは修道者なので、自分のできることをと思うんですが、一緒に働いている職員が世代もまちまちですし、お子さんがいたり、ということなんです。例えば有事の際の判断なんですが、お家のほうも心配で帰られる方もいると思うんですが、帰られたときに後ろめたい気持ちもあるかなと思ったりすると、若い方はお家が心配なら帰っていただきたいというのが非常にあって、でもそうなると現場が手薄になると、そのときになってみないとわからないんですが、そういうことに何か参考になるご意見があればと、お願いします。

鈴木：いろいろありましたよ。中堅の看護師でもパニックの方もいましたよ。病院のことはまったく考えられない人もいました。それでも院長は「今、出ると危ないから救護が来るまで我慢しなさい」と言ったにもかかわらず出て行った看護師もいましたが、その人は後に「手伝わなくて、すごく後悔した」と言っていました。その方は遺体安置所を何遍も探して歩いていたそうです。その人からは後に連絡が入って無事なことがわかったんですが、妊婦もいました。乳児を抱えたママもいましたので、その人たちは感情的にもたなくて、とても働けるような状態ではなかったです。もちろん妊婦は早く帰りたいと思っていたところに翌日、優先的に帰りました。若い人は3日くらいして不安定になることが多かったです。そちこちで泣いて仕事にならなくて。家族が迎えに来た人もいましたし、迎えに来て「もう少し私も頑張る」と言う人もいました。それとその時、非番だった人が出てきてくれ手伝ってくれたり、結局、津波のとき看護師は36人くらいいたんですが、最後は20人くらいで頑張ったということでした。我慢して一生懸命働いている看護師にとって、情緒不安定な人がいると、みんな気持ちが揺れるんですね。だから、むしろ不安定な人は帰ってもらったほうがいいのではと思うときがありまして、中堅の人たちが我慢強かったですね。だけれども、そこで我慢して働いたためによその病院に移動させられてから、辞めたりしましたね。一生懸命働いた人ほど一年以上経てからうつになったりという人もいました。何だかんだ言っても何をどうすれば良かったのかというのはいまだにわかりません。

佐藤：ありがとうございました。当院でも被災しましたので、家に戻れないというような状況ではなかったのですが、まず子どものいる看護師は帰ってもらいました。そしてお家が大丈夫ということなら、また戻ってきて働いてもらうというようにしました。それから、一人暮らしのナースは、一人では怖いからと病院に泊まり仕事をしていました。それから、子どもさんを連れてきて自分は夜勤をしたなど、いろいろな形で働きました。では、次の方、いかがですか。

質問者F：仙台市の宮城野区にある特別養護老人ホームバルシアの者です。とても貴重なお話をいただき、私も震災のことを改めていろいろ思い出しました。私どもの施設は当時は福祉避難所としてショートステイの方々の生活は当然なんですが、地域に住む高齢者の方々が在宅されている方や一般の避難所では難しい高齢者、認知症や車椅子の方々を30人お引き受けいたしました。施設の入居者については職員が一生懸命ケアしましたので、安定しておりまして、大きな変化はなかったんですけども、在宅の高齢者の方々が、慣れない環境に急に來ましたので、とてもとまどいが多かったです。福島県の今現在の高齢者の現状はいかがでしょうか。避難先での生活、そしてどんな支援をされていらっしゃるのでしょうか。

東谷：福島でも中通りの状況しかわからないのですが、震災当時は県内の避難所に親戚の方が連れていったという方もいらしたようです。元気な100歳の方なんですが、急に説明もなく避難といわれ錯乱状態になって、とても親戚のお宅にいられなくてひっそりと自宅に戻ったというケースもありました。20キロ圏内は全部チェックしていたんですが、30キロ圏内は屋内退避という言葉を使っていたので、避難しなさいと言ってもとても無理だということで2、3日が限界でした。100歳の人もカーテンを閉めて自宅にいたということが後からわかりました。現在、30キロ圏内は避難解除で戻っている高齢者については、去年から移動スーパーとか、それから県派遣の保健師が訪問看護したり、包括支援センターの地区担当が回って歩くなどしています。現実には隣に誰も帰っていないし、山奥ですから隣といっても3キロも先だったりするので現実には要支援の申請がとても増えています。

佐藤：ありがとうございました。

総合司会：ではここで、実は仙台で亡くなられた神父様がいらっしゃいますので、そのお話をエメ神父様にぜひ聞かせていただきたいと思いますのですが・・・。

神父：今、いろいろなお話がありました。私の仲間、うちの教会の一人の神父は津波のときに流されたということではなく、心臓発作で亡くなったんです。会議のために近くの元寺小路教会に来て、会議が終わったところで地震が発生し、みなさんと同じようにそこで避難したところで私はそのとき、声をかけた。私は建物の中に居たんですよ。まず建物の点検をしてからすぐ外に出て、そのときに出会った。そして、中に入るよう誘ったけれど、建物の中も恐ろしくて入りませんと言われたんですけども、自分の教会と幼稚園のことは気にして、塩釜というここから30分ほどの町で、そこで出掛けたんですが4時50分頃に津波が来て国道45号線は交通止めされ、それで別の道路を歩いて車の中で過ごしていて、次の朝8時教会まで行きたいと歩いたところ心臓発作で亡くなったということなのです。それで、私は知らなかった。その日の夜11時頃、電気、電話が戻ってきた時国際電話で聞いてうちのカナダの総長からその神父様が亡くなったという知らせが来た。次の日、司教様と一緒に遺体の確認に行きましたら、そのとおりでした。ほかの話もしたいです。5月3日、マリーンさんから電話が来て、前の日にフィリピン人の女性が

南三陸で、遺体で見つかったというので行きました。まず警察に連絡し「行ってもいいですか」と言うと5時まで来てくださいというので行った。体育館の中に入り警察に挨拶し、12人の大人も子どもの遺体もあった。手続きが終わったと思ったらそうじゃない。警察のひとたちが出てきて12人の柩を囲んで私がお祈りする間、ずっと警察の人たちも立っていたんですよ。それがすごく印象的だった。もう一つの出来事は、亡くなった神父の火葬した日、お骨を持ってきてうちに安置してからカナダの本部にeメールで報告したんです。その報告を終えたところで、電話が来ました。その方は「昨日、うちの弟が気仙沼で遺体で見つかった。それで遺体は仙台に連れてきたので、お祈りに来てくださいませんか」と。そこはとても思い空気だったですよ。人々はあまりいかなかったし服はボロボロ、そしてお祈りしました。亡くなった人のお父さん79歳、お医者さんで、看護師から引っ張られ裏の玄関から逃げて無事だった。それで次男は医者のお仕事をしていた彼も無事だった。私に電話した人はお姉さんで薬剤師。あと4男は仙台空港で働いていて自分の車が流されていくのを見ていましたが何もできなかったそうです。滑走路には7mの津波が来ました。そして長男は関東で、車で家族と犬を連れ、ギリギリで助かった。また親戚が流された。そういう話はけっこうあったんですよ。もう一つは、ご遺体はいっぱいあるけど性別も名前も誰なのかわからない。いろいろな宗教関係の人たちはみんな、集まって火葬するとき、みんな順番にお祈りしていきました。そして毎月11日、カトリックもプロテスタントも、仏教も天理教もみんな合同でお祈りしたんです。そしてある月は仏教、ある月はカトリックと一年続けていきました、一年以上も。そのとき強く感じたのは大きな災害があったとき、人間としての力を合わせ、さまざまな国境、枠を超えて対応するしかないということです。それがひとつの経験です。もっとたくさんありますけれど、突然のことなので、これくらいで失礼します。(拍手)



司会：突然のご指名で申し訳ありませんでしたが、とてもいいお話ありがとうございました。では、これでパネルディスカッションを終了させていただきます。

感謝のメッセージ

人と人が支え合って生きる現場

オタワ愛徳修道女会 Sr.木田 まゆみ



仙台市宮城野区に本部修道院を置く私たちは、東日本大震災後、被災者、支援する人々を修道院に迎えること、被災地に行くことを通して、実に多くの方々に会いました。一生分の人に会ったのではと思うほどです。それは、人間が人間を支え、支えられることによって、生きていく現場に居合わせる体験でした。

1. 人と物が行き交う交差点



大震災後、私たちの管区本部修道院は、ライフラインが回復するまで2週間ほどかかりましたが、修道院が震度6強に耐えたことで、人々と物資を迎えることができました。3月17日、仙台教区サポートセンターの紹介で一人の女性を受け入れたことがスタートです。その後、ガソリンのメドが立たないため、家ではなく修道院から職場に通う人、人工透析に通う被災された女性（彼女は約半年修道院に住みました。）

と出会い、修道院を提供していきました。宿泊する人はもちろん、支援物資を取りに訪ねてきた人に「食事していきませんか。お茶していきませんか。」と声をかけていたことを思い出します。どんどん支援物資が送られる中、サポートの仕方を探ろうと様々な教区から神父様方、シスター方も仙台入りし、本部修道院は、次第に人と物が行き交う「交差点」になっていきました。計画などももちろんなし、人手もなし。そんな状態だったので。

修道院として、3月18日に、仙台サポートセンターに具体的な支援協力を申し出ました。一時的に避難する必要がある方、ボランティアに本部修道院を宿泊場所として提供できることを伝えたのです。ちょうど、修道院の一つのスペースは、事情のある家族が一時的に住めるような場を確保していましたので、大変役立ちました。ある日など九州から2人の神父様、カリタス・ジャパンのスタッフ、そこに石巻で歌うスモールクワイヤーのシスター達9名、夜だけ宿泊する隣りにお住まいのシスター方5名と満員御礼の宿屋状態だったことが思い出されます。

まもなく、多くの女子修道会、小教区、そして個人が物資の支援に動き出し、仙台北部修道院に溢れるほどの支援物資が届き始めました。3月21日に仙台の宅急便配送センターに支援物資第一弾をガソリンの供給がない中、車3台で19箱取りに行ったことを覚えています。支援物資には、祈りとも言える思いが込められています。必要とする方々に届けられるように祈りながら持ち帰ってきました。段ボールを開けると赤ちゃん用の紙おむつのセットが入っており、パッケージ一つ一つに「希望を持ち続けてください。」と手書きのメッセージが書かれているものなど、思わず涙が出る支援物資もありました。全国、また海外の女子

修道会、阪神大震災を体験した小教区のネットワークと動きの迅速さは見事でした。離れた場所で起こっている事をわが身の事と捉え、行動して下さった多くの方々がいる、私たちはそのことの証人です。この場を借りて、あらためて、心から感謝申し上げます。

被災された方々は、本部修道院のメンバーが働く老人ホーム、幼稚園、病院にも入所してこられました。その方々の「喪失」の痛みを思い、心を通わせることに努め、先が見えない中で、共にいようとしたのです。

2、宿屋として～一緒に食べる、一緒にいることの大切さ

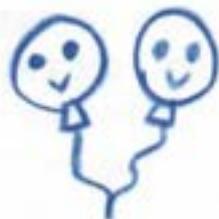


修道院は、被災者支援のために来る人々の宿泊場所でもありました。カリタス・ジャパンのスタッフ、その他長期で、サポートセンターベースで働く各女子修道会のシスターズ・リレーの方の休憩場所になりました。震災後の一年間、修道院に宿泊した人数は100名を越えています。「人ともものが行き交う交差点」は、支援に尽力し、疲労を抱えた支援スタッフが、静けさの中に身を置き、力を得る宿屋にもなりました。「旅人を迎え、もてなす」修道院としての役割と言えるでしょう。

被災地のサポートをしているスタッフ達は悩み、疲労感が増してきます。そんな時、食卓に共にいること、聞くという時間の大切さを感じます。何気なく話しを聞く、一緒にいるということが、人と人をつなぐ力があるということを強く感じます。ミサがイエスと弟子をつなぐ食卓であること、イエス様が一緒に食事をするをとても大切にすることがよくわかります。修道院では、毎日誰が泊り、夕食が何人なのかわからない、来た人と共にあるものを一緒に食べるということが自然になっていきました。一人も違わないようにチェックしていた、震災前とは大違いです。修道院の建物が生かされるのは本当に嬉しいことでした。建物が喜んでいるのがわかりました。ある支部修道院の献堂式での司祭の言葉「この建物を愛で汚して下さい。」が響いています。

3、見て、感じて、動く

2012年4月から山形に転勤になり、現在シスターになろうとしている人々の養成担当をしている私は、被災者に直接関わる生活から離れています。今できることは、被災地支援のためには裸でいる人から話しを聞くこと、新聞、テレビ等で情報を得、毎日祈ることです。被災された方々は、期限付きの仮設住宅での新しいコミュニティづくりの中で、自死、孤独死、アルコール依存、ギャンブル依存などが増えていると聞きます。このようないのちを減ぼす荒れ野のような状況は、被災地だけでなく、先進国として突っ走ってきた日本の各地に広がる人と人が遮断された現実です。行って現場に立ち、見て、感じて、心動かされ、自分にできることを続けていくこと、その思いが被災された一人ひとりの生活の復興、希望の再構築の力につながっていくのではないのでしょうか。



「現代人の喜びと希望、悲しみと苦しみ、特に貧しい人々とすべて苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子対の喜びと希望、悲しみと苦しみでもある。真に人間的な事柄で、キリストの弟子たちの心の反響を呼び起こさないものは一つもない。」（現代世界憲章序文）

苦しむ人々を自分の一部と思えるほど、共にあろうとすることはイエスの教えと生き方であり、キリストの弟子の生き方です。神とつながり人を受け入れる広さと配慮を持ち、感謝されることを望まずに黙々と働き、悲惨を前にしてもたじろがないで祈り働く人は、決して消えない希望に生かされている人です。

安定した環境、ある程度の生活が保障された中では危機感がありません。その中で私たちは、もしかして信じる力を発揮できていないのかもしれないかもしれません。いのち、尊厳が生きられていない場、混乱と不安が渦巻く「いのちの危機感」があるところに、神の人、自分のことは放っておいて、神様の心、イエスの心を生きることに関心を合わせて生きる人が必要とされているのです。

震災直後、日頃から関わっているダルク「薬物依存回復施設」のメンバーがガソリンの給油の見通しが立たない中ほとんど毎日水、命の水を運んでくれたことは決して忘れられない出来事です。思うと日頃意識せずに「支えようとする」ことに力が入り、「支えられている者」であるという自覚が薄いことに気づかされます。厳しい状況の中で「いただいた体験」は心に刻まれます。ボランティアをしてきた人は言います。「いただく事が多かった」と。支援させていただきながら、命をいただき、支えられていると感じるところに大切ないのちの交流が生まれます。

私は、震災前と変わらない生活に戻っていますが、震災前と全く違った生き方へと導かれていると感じています。それは、人間が支え合うという本質を神さまから見せていただいたからです。

分かち合いを終えるにあたって、一つの言葉を紹介させていただきます。

本当に世を変えるのは 静かな持続する意志に支えられた

力まず、目立たず、おのれを頼まず 速効を求めず 粘り強く 無私な行為

（「木を植えた人」あとがき）



基調講演 II

「大津波を乗り越えて」

カトリック大船渡教会信徒 医師 山浦 玄嗣



皆さん、こんにちは。ケセンの山浦でございます。ケセンというとみなさんは気仙沼と思われるようですが、気仙沼は宮城県で、気仙というのは岩手県の沿岸南部地方で大船渡市、陸前高田市などあのあたりのことを気仙郡といいます。昔から大工がたくさんおり、気仙大工というのが有名であります。だいたい半分くらいが大工、残りは漁師ですね。この前は津波が来まして、だいぶやられましたけど、私は気仙の大船渡の間でございまして。大船渡の教会は、この管内の教会では最も酷い損害を受けたのではない

かと思えます。丘の上に建つ建物の前面がガバッとえぐりとられ、すべて流されてしまいました。ですから、私たちの懐かしい先輩たちの遺骨は、すべて散骨されてしまったんですね。今度の津波は本当に大きなものでしたから日本中からお世話になり、本当にありがたいと思っております。でも私どもにとっては津波は珍しいものではありません。いわば年中行事なんです。だいたい大きい津波は30年から40年周期でやってくるので、現在80代の人の中には「今度で家を流されたのは3回目だ」という人もいます。でも性懲りもなくここに住んでいるんですね。昭和35年にはチリ地震津波で大船渡では約50人が亡くなりました。その前の昭和8年にも津波があった。ですからその80歳の方は体験しているわけです。その前は明治29年、幕末にもあったそうです。明治29年の津波に関しては、私は体験していませんが、記憶はあるんです。私の祖母は明治9年生まれなので津波のときに20歳でした。だからよく覚えているわけですよ。明治29年の津波はこうだった、ああだったと、しょっちゅう聞かされていたので疑似映像、疑似記憶のようなものができあがっているんです。今回の津波でここの地域の「津波てんでんこ」ということわざが日本中に有名になりました。津波だ！となったら、とにかく親も子もなく、何もかまわずてんでんこに逃げろという掟なんです。今回の津波では 多くの人が他の人を助けようとして死んだ。それはそれとして尊いことなんですけど、この「津波てんでんこ」という非情な掟は、なぜできたかというのと、それは津波で壊滅した自分たちのふるさと、家、家族を復興するために、いかに血を吐くような思いをしなければならぬか、そのためには猫の手でも欲しいんです。津波が来たら死ぬ人は死ぬんだ、どんなこととしてでも生きろ！という悲痛な叫びから「津波てんでんこ」という一見、非情な掟が生まれたのだと私は思っております。まあ、そういう地方にずっと育ちましたので、我々の頭の中には津波のイメージがいつもいつも付きまわっております。地震が来ると、すぐ津波は！と条件反射のようなもんです。そして地震が来たら、キジが鳴くかどうかすぐ耳を澄ますんです。キジがケーンケーンと鳴く。そしたら大丈夫なんです。動物は不思議な本能で津波が来るのがわかると逃げるんだそうです。キジが鳴かないと大津波が来るという言い伝えがあるんです。だから私たちの地域では津波は想定外ではないんです。いつも想定の中で生きています。今回の津波も何十年も前から30年以内に起きると言

われていたんです。98%の確立だと言われていた。昭和35年のチリ津波というのは外国産ですからね。地元産の津波は昭和8年の津波で、そこから全然来ていないわけです。私は医者なので数えるときにめんどうなので、今年は昭和で数えると昭和88年、大正なら102年と伝えるんです。ですから80年も津波が来ていない。いつ来るかいつ来るかと思っていました。だから今度の津波は、ああ来たかという感じてした。昼間でしたからね、これが夜中だったらきっと被害は10倍だったでしょうね。私の住んでいるところは大船渡の盛町というところで、大船渡湾から約2.5キロくらいのところで、そこまで津波が来たのは今回が初めてでした。

私は昭和15年生まれです。まだ大日本帝国が燦然と光輝いていた頃でした。その頃、我々カトリック信徒は国賊と言われ、とても迫害されていた時代でした。天皇陛下を拝まないし、神社にも拝まない。あれは国賊でスパイかもしれないというので、いつも特高警察がついてまわっていました。冗談で言うんですけど、だから夜道も安全だった（笑）。そういう時代だったんです。私は越喜来村というところで育ちました。そこに耶穌はたった一軒しかなかったんです。父は私が小学校1年のときに亡くなり、親なし子で育ちました。その頃、戦に負けたわけです。村の人たちは「日本が戦に負けたのは、おめだち耶穌がいるからだ、耶穌がいるから日本の神様が頼みの神風を吹かせてくれなかった」と、いわば八つ当たりなんです。道を歩いていると馬糞をなげられたもんです。私も負けていけないので、たった一人の少年十字軍として糞戦していたものです。でも内心はやっぱり寂しいもんでした。いじめられるんですから。ある時、松林の中でぼんやりと海を眺めていたんです。子どもの頃です。その場所が好きだったんですね。なにか神様の気が風になってそよそよと吹いてきたんです。体の中をスッと通り抜けて行って幸せな懐かしいような、慰められたような気持ちになったものでした。小学校2、3年くらいの頃だったと思います。その頃は自動車なんかなく、みんな馬に乗ってました。岩手県は馬産地ですからね。バコバコ、バコバコと馬がやってきたんですよ。その馬に乗っていたヒゲだらけの男が私のほうを見てニヤッと笑ったので、私はものすごいショックを受けたんです。勝手に「あ、イエズス様だ！」と思って嬉しくなりました。イエズス様が俺を励ましたり慰めたりして「おい、元気か！頑張ってるか！」と言われたような気になって、本当に嬉しかったんです。それからの私は、この村に本当はイエズス様がいるんだと思い込むようになったんです。空想と現実がごちゃまぜになったんです。その目で見たら、いるんですよ！地面に五寸釘を打ち付ける男の子の遊びがあるんですが、あるとき大工さんが働いているところに頻繁に行き、五寸釘を探してたんです。そして「おい、ほれやるぞ」と若い大工が五寸釘を2本、私の前に差し出したんです。嬉しくて顔を見上げたら、あの髭面のイエズス様だったんですよ。私はもう嬉しくて、そうだイエズス様は化けてこの村の中に住んでいるんだと。そうすると、あの大工の家の母さんはマリア様だ！ガラガラしたおばちゃんなんですけどね。そして村では地引き網を手伝ったりすると、小遣いに魚を少しくれることもあって、朝早く行くとエイッショ、エイッショと網を引く大きな男がいて私の顔を見てニヤッと笑ったんです。これはペテロだったんですよ（笑）。するとその弟はアンデレだったんですね。すると網元の旦那はゼブダイ親方だと、その息子

がいるじゃないか、それはヤコブだ、ヨハネがいるぞと、いっぱいいるわけですよ。役場のあの意地悪い顔してるのはマタイじゃないかとかね（笑）。そうしてみると、私の住む越喜来村にはみんないるんですよ。でも、そんな話は誰に言っても通じなかった（笑）。村の子どもたち同士で遊ぶときに「おめだち、耶穌ヤソとそんなに嫌うけど、ヤソ様って本当はいい男なんだぞ！」と、私は子どものまわらない舌で一生懸命になって言うんですが、誰もわからないわけです。私が言ってもわからないならばと聖書を持ち出して読んできかせたんですよ。こいつらも耶穌になるんでないかと。ところが全然通じないんだね（笑）。その頃の翻訳ですからね「誠に誠に我、汝らに告ぐ〜」というのは東北の村の少年たちに分かるわけがないんですね。そこで大きな青い絵本があったので、それを見せたらどうかなと開けてみたら、裸にされた死人が吊るされているわけですよ。みんな腰抜かさんばかりに驚いて、「なんていうものをおめえは拝んでるんだ！」と、またしても馬糞を持ってくるわけですよ（笑）。これは東京弁で書いてあるからだめなんだ、おらほのケセンの言葉に直してイエズス様の



ことを伝えなければだめだ！と。だいたいこの村にいるイエズス様もマリア様も東京弁なんか喋っていないぞ、みんな越喜来弁だもの、聖書が東京弁で書いてあるのがおかしいのだと、私は思ったのです。俺は大きくなったら、聖書をおらほの言葉に絶対直すぞと思っていたのです。ところがおらほの言葉には文字がないんですよ。忘れもしない小学校3年の国語の時間でした。先生が言ったんです。「いいが、おめだち作文というものはな何も東京あたりのりっぱな言葉で書がなくてもいいんだ。おめだちがいつも使ってる言葉で暮らしのありのままの姿を素直に書けば、りっぱな綴り方というもんだ」と。その頃、生活綴り方運動が流行ってたんです。そう言われたので私は嬉しくて、すぐに書くべと思ったんです。でも一行も書けなかった。「おらいのばっば、おれのごとたうえなしとかだった」うちのお祖母さん、俺をたわいのないおろかもものと言ったという意味を書こうと思ったんです。おらいのばっばまではカナで書けました。でも“たうえなし”のウェということばが書けないんですよ（笑）。“シ”でも“ズ”でもない。困ってしまいました。今の日本人はソフトウェアだのハードウェアだの聞き分けることができるようになりましたが、その頃の東北地方は、そういう意味では先進地帯で、ちゃんとわかっていたんですね（笑）。だけど文字がないんです。そこで「先生、たうえなしの“ウェ”はなじよして書くの」と聞いたんです。先生もああだこうだと言うものの困ったんですね。私はしつこい性格だったもんですから、しつこく何度も聞いたら、先生が痲痺をおこしてしまって叱られたんです。私はショックを受け、そうか、我々の言葉には文字がないんだと。悔しかったですね。まるで野蛮人ではないかと。よし、今にみてる！俺は大きくなったらおらほの言葉のりっぱな文字ばこさえて、イエズス様のことを書くんだ！と思ったのが三つ子の魂なんですね。少し前に釜石で講演を頼まれたときに、講演が終わって楽屋でお茶っこを飲んでいたときに、よぼよぼのおじいさんがやってきたんです。「いやー、あれは俺でがす」と言うんです。恩師だったんですよ。たまげましたね。そういうことがありました。

その後、私は医者になりました。みなさんおわかりかと思いますが医者ってけっこう勉強することがたくさんあるから大変なんです。医者になるのも忙しいし、なってからもめちゃくちゃ忙しい。それで少年の日の夢はしばらく棚あげになっていたんです。東北大学でしたから、ずっと仙台で暮らしていました。35歳のときに村のおじさんがやってきました。私は嬉しくてね。おじさんの言っている言葉は全部わかるんです。ところが、それに返事をする私の舌がまわらなくなっていたんです。すっかり標準語なまりになっていたんです(笑)。あのときくらい、ショックだったことはないですね。そのときに私を支えたのは「俺はケセンの人間、ケセン衆だ!」という誇りでした。そこで「よし!俺の舌の上にもう一度ケセンの言葉を蘇らせてやろう!」と、ここ仙台の地で決心したんです。それからは一生懸命になって考えた。でも医者とはとにかく忙しい。ですが、トイレにいる間は考えられる。どんどんどんどん思い出した言葉をカードに書いていったんです。そうすると文字がないのでこしらえていく。「ス」ってどう書くか。「スッ」は、「シ」と「ス」の間だから、スの横棒をとってしまうと、どっちにも似てるでしょ。そういうケセンかな文字を考えました。ところがそれでも書けなくなりました。アクセントが書けない。アクセントヲキチンとしないとケセン語がめちゃくちゃになるんです。「おらいさいぐ」というのは文字で書くと同じですが、「おらいさ、いく」というのは「わが家に行く」という意味ですが、「おら、いさいぐ」となると、「私は家に行く」という意味ですから、アクセントをキチンと書かないと。そこでケセン式ローマ字というのを考えました。そんなこんなしてましたが、私は言語学者ではないし、中学校のころに習った文法しか知らない。ところがその文法では、ケセン語が書けないし、説明することもできない。しかたがないからケセン語文法を考えなくてはならない。とても大変なんですよ、本当に。そこで26、7年前に「ケセン語入門」という本を作りました。かつて東北弁がものすごく差別されたことがあったんですね。ちょこっと喋っただけで満座の笑い者になったり、そのために絶望して首つり自殺したり、人殺ししたりというのは私の世代にはいっぱいいたんです。そんな時代に「ケセン語入門」を作ったんです。みんなから笑われました。いったい誰がこの本で勉強するんだと。普通、こうした本は300冊も作ればいいんですが、大船渡の出版してくれたところが、これはすごい!と応援してくれ、2000冊も刷ったんですよ。そしたらあっという間に売れてしまったんです。なんてかというケセンの人たちが「おらほの言葉は日本語ともフランス語、アラビア語とも並ぶケセン語っつんださ」と、みんな大喜びで、町中にケセンナショナリズムが広がり、町中の店が八百屋も魚屋も床屋もみんなして「ケセン語入門」を置いたんです。どこの店も「ケセン語入門あります」と紙貼ってね(笑)。それで本屋さんは味をしめて、また2000冊刷ったんです。NHKがそれを聞いてびっくり仰天して、「いや、地方にはこんなに豊かな文化がある。我々はみんな東京一色に塗りつぶすというとてもないことをしていた」と、ケセン語のことを取り上げる番組をいっぱい作って全国にたくさん放送するようになったんです。ですから私、すいぶんテレビにも出てるんです。そして全国の方言というものを見直そうという機運が起きて、その後は方言差別ということがどんどんなくなっていったんです。私はその意味では大恩人なんです(笑)。そして大船渡に帰って開業したら、みんな喜んでね「ケセン語弁論大会」だの「ケセン語劇団」だのをやってね(笑)。私も帰省し、100%

ケセン語の中で暮らしてるわけですので、忘れかけていたケセン語がどんどん上達していったんです。そこで今度は「ケセン語大辞典」というものを作りました。すごく厚い本で上下2冊です。やっとできあがったのは60歳のときでした。35歳で考えたときには髪の毛は黒々だったんですが、すっかり白くなってしまいましたね、やっと私はケセン語で文章を書く自信を持てるようになってね、それで聖書の4つの福音書をケセン語によって翻訳をしようと思ったんです。そうすれば、みんなに伝わるに違いないと思ってね。最初はマタイです。ところが小学校のときと同じで、1行も翻訳できなかつたんです。マタイの一番最初は何と書いてあるか、みなさんにご存じですね「アブラハムの子ダビデの子イエスキリストの系図」と書いてある。あとは何だかわけわからない人の名前がズラズラ書かれています。ところが、その一番最初がケセンの言葉に訳せないんです。だって皆さん、考えてごらん下さい。アブラハムの子は誰ですか。イサクでしょ。ダビデの子はソロモンでしょ。イエスはそこからずいぶん遠い人ですよ。1700年もの差があるんです。ダビデからも1000年の差がある。イエスは990歳くらいになってしまいます。そんなことを地元の人たちに何と伝えればいいのか何と思うか、全然話が通じないじゃないかと思った。私は生まれたときからのカトリックです。7日目に洗礼を受けているんですから。そういう意味では純粹培養されて、今日だってちゃんと拝んできた。そういう意味では何とも思わなかったのにケセン語に訳そうと思ったらできない。アブラハムの子はイエスではない、ダビデの子でもない、でもなぜ子と書いてあるのか。そういうことを考えていったら聖書はわけのわからないことだらけになってきたんです。私は生まれてすぐに洗礼を受けてから、一度も改心したことがないんです。「そこで人々はイエスにつまづいた」というのをケセンでは“つまづく”というのを“けつまづく”と言うんです。そうすると、イエス様がここに寝てて、みんながけつまづいて将棋倒しになったということになります。おかしいでしょ。私は東北人で日本語わからないからいつも謙虚な気持ちで机の上に国語辞典を置いているんです。ちょっとでもわからないと辞典をひく癖があるんです。“つまづく”を調べてみると、“～につまづく”と“～でつまづく”の2つの使い方があり、“に”を使う場合は、障害にぶつかってよろけることをいう。“で”の場合は、何かの事業がうまくいかなくなるということなんですね。だから2つの使い方ではっきり意味が違うんです。だから“イエスにつまづいた”なら、やっぱりけつまづいたことになるんですね。週間新潮という俗悪な週刊誌がありますね。私の愛読書なんですけど(笑)あれによく“酒と女でつまづいた”とかの記事が出てるでしょ。もしこれが“酒と女につまづいた”ならどうですか(笑)。ですから、この聖書はおかしくないか。人々がイエスにつまづくはずがないんです。そんなバカな話はないんです。そこで私はしつこいものですから、日本聖書協会に電話し「これは誰が訳したんですか」と聞いたんです。すると「秘密でございます」という返事でした(笑)。六法全書もひいてみたんです。民法に書いてありました「子とは、第一親等の直系家族のこと」。これが日本語の“子”の意味です。第二親等は孫という。第三親等はひ孫であると。次はやしゃご。その次は、めんどくさいからケセンでは“そんそろご”というんです。イエス様はアブラハムの子ではなく“そんそろご”なんですね。私ね、次から次とそういうことにぶつかって、嫌になっちゃったんです。その悩みを私より10歳も若いんですが五島列島出身でDNAまでヤソで医者をしている友

人に打ち明けたんです。彼は聖書学者でもありとても優秀な人なんです。そしたらケラケラ笑ってね「日本語の聖書なんか読むからダメなんです。あれはギリシャ語で書いてあるんですからギリシャ語の聖書を読みなさい」と、言うんです。あのときくらいショックだったのではないですね。そして3日くらいしたらギリシャ語の聖書をはじめ、辞書や参考書をどっさり送ってきてくださったんです。そこからねじりはしまきで、何くそと猛勉強しました。そしたら案外面白いんです。その気になればたいしたことないんですね。ギリシャに行けば子どもだって喋ってるんですからね（笑）。どんどん不思議だったことがわかっていったんです。“アブラハムの子”も、“子”じゃないんですね、辞書を調べると、確かにヘイオスアブラハム、ヘイオスダビデで、ヘイオスには息子という意味はあるんですが、ちゃんと子孫という意味があるんです。でも日本語の“子”には“子孫”という意味はないんです。それなら“ダビデの子孫”と書けばいいじゃないですか。聖書学者というのは、東北弁でいうと“かばねやみ”なんですね（笑）。怠け者なんです、一番最初の意味だけ取り上げ最後のほうを見なかったんですね。ある聖書学者に私、文句を言ったんです。そしたら「日本語の“子”には子孫という意味はない。聖書の“子”には子孫という意味がある。だから我々はこのようにして日本語の意味を豊かにしているんです」と言うんですよ。そんなこと！私は腹が立ってね「おだすな！」と思ったんですが、それでは聖書学者はわかるのかもしれないけど、我々にはわからないんですからね。“つまづく”という言葉もスタンダイルというギリシャ語で、“腹を立てる”という意味なんです。あまりにも非常識な言動でカンカンに腹を立てるといことなんです。あの方は非常識なんです。およばれして御馳走になるときはちゃんと手を洗ってけがれを落として食べるのが作法ですね。でもイエス様は手も洗わないでムシャムシャ食べはじめたんですね。そこでひんしゆくをかったんです。そしたらイエス様は「口から入るもので人を汚すものはない」と言ったんです。口から出るものが人を汚すのだと。ちゃんと聖書に書いてありますね。そんなことを言うからみんなカンカンに腹を立て、結局、畳の上で死ぬなかったんです（笑）。我々は、そういう方の弟子なんですよ（笑）。スタンダイルを“つまづいた”と訳したんでは一向に伝わってこないわけです。私は聖書をケセン語に訳すときに2つの原則というか誓いを作ったんです。ひとつは、絶対ギリシャ語から訳す。もうひとつは漢語・教会用語ではなく、世間様が耳で聞いてすぐわかるようにということです。それで作ったのが「ケセン語訳福音書」です。これが完成したときは嬉しくて嬉しくてね。それでパパ様に持っていったんです。パパ様に「このたび“ケセン語訳福音書”を作りました。どうか特別謁見してください」と手紙を出したんです。「でも、私は医者で忙しいもんですから、いつでもいいというわけにもいかない。5月の連休に行きます。パパ様もお忙しいでしょうから万障繰り合わせの上よろしくお願いします」（笑）と、ちゃんと書いたんです。そしたらうんともすんとも返事が来ないんですね（笑）。ヨハネ・パウロ二世はその頃、だいぶヨボヨボで、ダメかなと思ってたんですが、ちょうど浜尾様が棺機御になられたので浜尾様にも手紙を出したんです。そしたらOKが出たんです。もう私は町中で「おい、俺はバチカンに行くから一緒に行くべ」とみんなに声かけ、「俺はヤソでないのにいいのすか」と言うんだけど、「いいから行くべ」と言ったら30人くらい集まってね。「ケセン遣欧使節団」と名付けてね（笑）。出版元の熊谷雅也くんといって今、会場にもい

ますが（拍手）、彼がケセン語訳聖書を必死になって作った人なんです。彼が団長になってみんなでバチカンに行つたんです。彼も私も紋付き羽織り袴でね。もうケセン人は目立ちたがりやですからね（笑）。サン・ピエトロ大聖堂に2万人くらいの巡礼がぎっしりで皆さん席をとるのに1年くらい前から予約しなければならないのに、我々が案内されたのは大聖堂の赤い天蓋の舌にある玉座のババ様の隣に座らせられたの。すばらしかったですよ。そして指輪に接吻刷るんですよ、あれはそんじょそこの人はできないんです（笑）。嬉しかったですね。ローマは日本請れだったですよ（笑）。そうやって「ケセン語訳聖書」を作ったんですが、これを作るときも大変だったんですよ。だってケセンにねカトリック信者は200人くらいしかいないんです。まじめに教会に来るのは、その4分の1でしょ、どこだってね。たったそれしかないのに本を作ったって売れるわけがないでしょ。でも原稿が積み重なっていると私はどうしようかなダメかな、でもガリ版刷りでもいいから作りたいという思いもあってね、そしたら、来年から21世紀になるという年末に、彼と飲んだんです。熊谷君は印刷屋さんで名刺とチラシを刷ってる男なんです。彼が言うには「俺は人様の名刺とチラシだけ刷ってこの一生を終わると思うといかにも悔しい。鷹は飛び立つときに大地に爪痕を残す。俺も鷹のようにガリガリと爪痕を残して空高く飛びたい。我々の先祖はグーテンベルグだ！情報を加工し世界の人々を豊かにする、そういう仕事を21世紀のグーテンベルグ熊谷雅也、この俺がやるんだ！」と言って、「21世紀のグーテンベルグ」という名刺を作って、私にくれたんですよ。私は占めた！と思ったんです、彼は本の出版なんて一度もしたことがないんです（笑）。出版なんて博打と同じなんです、売ればいいけど売れなかったら在庫と借金が山のように積み重なるという本当に大変な仕事なんです、彼はそんなことを全く知らない。その無知をいいことに私は「きみ、グーテンベルグが何をしたか知っているか」と言うと「彼は世界で初めて活字印刷をして聖書を作り、大衆のものにした人です。私もそういう人になりたい」と。「実は私はケセン語で聖書を書いている」というと、彼は目の色を変えて喜んだんですね。「それこそ私がするべき仕事だ！」と私の原稿を持っていそいそと帰っていったんですが、一週間くらいしたら青い顔してやってきました。「グーテンベルグの伝記をもう一度読んだら、彼は最後に破産したとありました」と（笑）。そこがケセン男のいいところで「どうせ、ひっくりかえるならハテにひっくりかえる！」と言って、岩手県で一番有名な装丁人を雇い、箱入りのりっぱなものを作ったんです。そして、文字だけでは何だか伝わらないだろうということでCDも入れたんです。全編を私、朗読してね。だからすごい豪華本になったんです。売れるかなと思っていたら、これが売れたんですよ。NHKのおかげなんです。NHKがこの話を聞きつけて「こころの時代」という番組の全国放送でね。そしたら本ができあがる前から全国から注文が殺到したんです。そして売れに売れて、あっという間に売り切れ、また増刷して、彼は破産しないで済んだんですよ（笑）。それをバチカンに持っていったわけです。それがとにかく売れたので全国各地で講演を頼まれるようになったんです。普通の日には医者ですから患者さんも大事にしなければいし、何年間かは土日なしで全国を動きまわりました。みんなが言うには「ケセン語はとていいが、やっぱり東北弁だから何がなんだかよくわからない。ケセン語をセケン語にしてくれ」というのです（笑）。そこで今度は「セケン語訳聖書」を作ったんです。日本人が楽しく読めるよう

に。そこで工夫をしたんです。イエズス様が生きていたあの時代の雰囲気をよくわかるように再現したいもんだと。そのためには今の民主主義の言葉ではダメだ、あの頃は王様や奴隷がいたり、地方によって方言がさまざまだったはず。たとえばイエズス様のふるさとガリラヤ地方には聖書の朗読をさせてはいけないという掟があったんですね。なぜならなまっているの、意味が反対になるんですって。“主の名を褒めたたえよ”が“主の名をほめたたえるな”のような意味になってしまうらしいんですね。歌も朗読もさせるなど差別されていたそうです。それがイエズス様とその一党なんです。だからイエズス様が捕まったときにペテロが大祭司の屋敷でばれるでしょ。“おまえはあのガリラヤ者の仲間だろう”と言われたときに“おら、知らねえ”と言ったもののそのなまりでバレたんですね。でも聖書読んでってペテロはなまってないでしょ。ペテロはなまらなければならぬんです。だから全国の出身地を使って翻訳することにしました。今から150年くらい前の幕末、身分差別があった頃の時代設定にしました。それで作ったのが「ガリラヤのイエ

シュー」という本です。イエズス様の本名はなまって、みんなイエシューだったんです。基本は江戸の武家の言葉にしました。イエズス様とその一党はガリラヤだから東北地方ですから聖なるケセン語が一番いい、カサルナの人は仙台弁、北のほうのフィリッポカイザリアは盛岡弁、もっと遠くは津軽弁、サマリア人は庄内弁と鶴岡弁、イエリコの方は名古屋弁、エルサレムの方は京都弁、大祭司は京都でも公家さん言葉、罪な女は先斗町、するい番頭さんは大阪船場あたり、ユダヤ地方の人々は長州弁、ハイカラなギリシャ人は長崎弁、征服者のローマ人は何といても西郷隆盛の鹿児島弁だというふうにして、この5、6年は日本中の方言



を勉強してそれはそれは大変な苦労をしたんです。それで古代ギリシャ語から薩摩弁に訳すだのという作業をしていたんです。でも私の翻訳では心もとないので日本国語学会方言研究会の先生方に添削していただいてね。また、その当時の聖書の常識は今の時代の常識ではないので注釈がないとわからないこともいっぱいあるんです。でも本文に入れてしまうと聖書を捏造したことになるので、私が書いたところは段落を下げたりね。

そして最後のグラ校正をやっていたときが3.11、看護師さんに呼ばれて自宅から医院のほうへ階段を降りたとき、ドーンともものすごい地鳴りがきて、幅一尺くらい揺れたんですね。来たな！と思いました。その揺れの長いこと長いこと。何かにしがみついていたんですが、そのうち酔ってきたようになってね。そのうち床をドンドン踏みつけ怒りだしてね、わめいてたんです。その私の姿をみて隣にいる看護婦さんがケラケラ笑いだしたりしてね。電気は消え、患者さんたちはいっぱいいるわ、サイレンはなるわ、大津波が来るという。ここまで来るはずはないと思っていましたが、待合室の患者さんをみんな逃がしてね。でも「先生、おらまだ薬もらってない」などという年寄りもいてね。「あした生きてたら薬なんていっぱいやっから、とにかく逃げろ」と。目の前を見たらどこか燃えてるし、医院の前をみんな逃げていく。白衣のままみんな逃がして自宅の女房に「逃げるぞ」というと「ちょっと待

って！私、いま着替えしてるの」と、まったく緊迫感がないんです（笑）。山形の出なもんですから津波の怖さを知らないんですね。そんなこんなで家は床上浸水で泥だらけになりました。電気も水も情報も何もないので、皆さんのほうがよくわかっていると思いますが、この分ではケセンのあたりは全滅だと。とにかく患者さんが殺到するだろうと、待合室の泥を出して、向かいの調剤薬局の泥の中から使えそうな薬をみんな探し出し、薬局の人にも「みんな、うちに来い」と。本来、開業医と薬局の癒着というのは犯罪です。一緒に酒を飲んでもいけないんですから。でも、収容したんです。「待合室を薬局にしろ！」と。「先生、そんなことしたら大変なことになりますよ」「いい！俺は人の道に背いたことをしてはいない。牢屋に入れられるなら俺が入るから、いいんだ！」と、無理やり引っ張って来て3日目から始めたんです。それから毎日毎日、200人以上を看たんです。おどげでなかったですよ。しかも薬もない。薬問屋は本当に苦労したんです。全国から医療スタッフと薬は、どんとやってきたんですが避難所の人のためになんです。避難所でないところにいる人の医療は開業医がみなければならなかった。そして薬もない。我々は保険診療をやっているわけです。そうするとただでやるわけにいかない。ガソリンもなくてね。岩手県というのは四国4県と同じ広さで、我々賊軍なのでそれだけ住民サービスが希薄なんです。岩手では花巻しか薬の集積所がない。花巻まで2時間もかかるんです。仕方ないので薬屋さんが警察にどなりこんで「俺は人の道に背くことはできない！ガソリンよこさねば何百人が死ぬんだ！という先生のセリフをもらいました」と言ってましたけどね。そういうことがずっと続きました。一人に5日分くらいしか出せない。しかも交通機関がないので、みんな歩いてやってくるんです。ところがケセンの人間というのは、もともと陽気なんです。勇猛果敢だし愉快なんです。メソメソしないんです。逆に「先生、齢なんだから気をつけろや。お大事にな」と言ったり「先生、これは戦だから負けるわけにはいかねえ」だのと、励まされたりしたもんです。こっちも飯も水もないところに、「先生、腹へったべ」と水や食べ物をもってきてくれたりね。一週間たったあたりに誰かが発電機を持ってきてくれたりね。私は患者さんに励まされ、助けられたように思います。1カ月も過ぎると、だんだんくたびれてきてね、うつ病が増えてきました。せっかく助かったのに大船渡湾に身投げして死んだり、避難所で辛い思いをしてやっとの思いで仮設住宅に入ってヤレヤレと思ったら3日目に亭主がどっかに行っちゃったので探したら身投げしてたとかね。また、元気な80歳くらいのじいさんがいまして、いつもうちに来ると太めの看護師さんが好きでよく抱きついてたんです。看護師さんも、よしよしと抱き締めてたもんでしたがね、もう人畜無害ですからね。ところが津波以来、痴呆化してしまっただね、「死んだほうが良かった、死んだほうが良かった」そればかり。家の人も困ってね、「どうしようもないから、ただただ背中ば手のひらでなでろ！」と伝えたんです。半年続けたら元気になってね。「先生、おかげさまで生きて！」っていうんですね。おもしろいもんです。そういうことがたくさんたくさんありました。

この本「ガリラヤのイエシュー」は、津波のときにすっかり流れてしまったんです。熊谷君の会社も全部流されてしまった。何もかもです。彼も命からがら逃げてね。何日目かに私のところにひょっこり現れて、「先生、原稿は残ってるか？ あるならまたやるべ！」と、あ

ちこちからパソコンやら何やらを集めて、そうやってこの本をまた作ったんです。あの瓦礫の中で、猛烈な悪臭の中でこれを作ったんです。その年の10月でした。11月と12月、普通の本屋さんには出さなかったんです。普通の本屋さんだと40%とられるんですから。そしたら電細なグーテンベルグが大変です。しかも何も無いんだよ。電話とインターネットだけで販売したら、ロコミって面白いですね、飛ぶように売れたんです。最初5000冊刷ったんですが2カ月で完売でした。ですので正月は増刷増刷で、キリスト教本屋大賞をいただいたんです。神戸の学校では教科書に使ってくださっているそうです。みなさんに喜んでいただいて、ありがたいと思っております。先々週はプロテスタントの大会でも話をしてきました。日本のキリスト教はプロテスタント40万人、カトリック40万人で80万人、そのうち真面目に教会に来ているのがだいたい20万人。その中で2万冊売れたので10人に1人は持っている。これを持っていない人は時代遅れだと言ったら、会場でものすごく売れました（笑）。



津波は来るんです。人は死ぬんです。でも、それは当たり前なんです。そういうふうには世の中はできているんです。我々はそれを乗り越えて乗り越えて生きていかねばならないんです。そして津波が来ようが何が来ようが、とにかく我々がしなければならぬことは、イエズス様という人はすばらしい人だ。

あの人の言うことはよくわかるということを知っていることを日本中の人に知らせることである、と私は思っております。

最後のお話しをします。この本を翻訳したときにいろいろな発見をしました。その中でも心に残った発見があります。イエズス様はたくさんの病人を治しました。新約聖書の中に“治す”という言葉がたくさんたくさん出てきます。“癒す”“治す”も同じです。大群衆をペロッと治したりするんですね。それで、“治す”と訳されている言葉がギリシャ語でどんな言葉に相当するのか調べました。そのほとんどが“テラペオ”という言葉なんです。セラピーですよ。残りはイヤマイという言葉です。このイヤマイは治すという意味なんです。テラペオを治すと訳すのはおかしいんじゃないかと。セラピーするということは治すことと同じではありません。ギリシャ語の辞書をひいてみると、テラペオという言葉の意味は、“セラポーンであること”つまり、“仕えるものになる”という意味なのです。だから治すと訳してはいけません。手当したんです、お世話したんです。仕えたんです。この病人たちの召し使いになったのです。医者の方はイヤトロスと言います。これはまさに治すという意味です。イエスは確かにイヤマイをしたんです。しかし、それよりはるかに多くのテラペオをしたのです。だからイエズス様は医者というよりは看護師だったんです。私、それを発見したときに非常に感銘を受けたんです。日本語の聖書はイエズス様を尊敬するあまり、イエズス様に失敗はない、治療したら必ず治るという先入観があったので、“治療したお世話をした”ということをも“治した”と訳したんですね。もちろん、一生懸命手を尽くして治

る人もいます。でも治らない人もいます。人は死ぬようにできているんですから仕方がないんです。いくら頑張ったって死ぬ人は死ぬんです。だけれども、生きようが死のうが生きている間、人間が本当に生き生きと幸せであること、そのために我々は医者も看護婦も自分の目の前にいる人がその死の間際まで本当に生きていてよかったと感謝と喜びの中に生きることができるように仕えるのです。

そしてイエズス様はセラペオをするセラポーンであったのです。福音書は奇跡の大盤振舞いのように書いてあるのは信仰がありすぎというか、もっと大事なことは“治した”ではなく、セラペオした、お世話したということが大事であるということ。そういう医療をしたいと思いません。ありがとうございました。



感謝の祭儀



閉会式

日本カトリック看護協会 会長 城 麗子

みなさま、2日間お疲れさまでした。ただいまの山浦先生の大変パワフルなご講演、ありがとうございました。どこからあのようなエネルギーが出てこられるのかと思いますが、やはり津波が来ても私たちはイエス様にお仕えしていくんだという精神がすべての根源だったのではないかと思います。きのうの片柳神父様のご講演でも、私たちの存在そのものが力になるのだとお話くださいました。そしてパネルディスカッションでも3人の方がそれぞれお話をくださったこと、大変心に残っております。中でも岩手県からお越しいただいた鈴木さんは震災当日、大槌病院におられ、家も何もかも流された中で患者さんたちの救出に懸命になられた。そして何日目かに生家に戻ると、まさに震災で亡くなったお母様の出棺のときだったというお話でした。たくさんのお母様を助けることはできたが、自宅にいたお母様を助けることができなかった。その心の痛みはいかばかりかと思えます。カトリック信徒ではないとお聞きしましたが、その生きざまはまさに殉教したような思いではなかったかと私は思いました。本当にキリストの輝きを世に知らしめると山浦先生もおっしゃいましたが、目の前にいる人のために仕えねばと改めて心した大会でした。本当に私、感激しております。ありがとうございました。一年間、準備をしてくださった仙台支部の皆さま、お疲れさまでした。そして、最初から最後まで出席くださいました160人もの皆さま、ありがとうございました。来年の全国大会のテーマは「生きる意味を問う」です。今回のテーマ「大震災を乗り越えて」に続くテーマとしていきたいと思えます。私たちの役目はこれからもっと大きくなっていくと思えます。今年の春はミサイルが飛んでくるのではないかという大変なときでした。そういう時期を通りぬけて私たちの使命、イエスの輝きとなって生きていけるようにと思えます。この2日間、出席してくださいました仙台教区の平賀司教様にも一言お話をいただきたく思えます。どうぞお願いいたします。

カトリック仙台教区長 平賀 徹夫司教

皆さん、2日間お疲れさまでした。雨で始まり雨で終わるという感じの2日間でしたが、予報では今日は午後から雨もあがるということのようです。これから被災地を巡る方々は、実際に見ていただいて、ここで本当に苦しんでいる方々がいたんだと、今も苦しんでいる人たちがいるんだということを感じていただき、そして皆さんの看護師としてのお働きの力強い原点になるといいと思っております。「JCNAの会員の祈り」の精神をいつもあたためながら、みなさまのお働きを助けてくださいますように。悲しいあるいは苦しいことに、辛い思いを抱えている人たちはいっぱいいます。私たちはいつもその人たちとのつながりの中で生き、イエス様が教えてくださった慈しみを生きていく印となることができればと思えます。皆さまの日本の中で、皆さまのつながりをあたためながら、ますます同じ精神でもって働いている人たちがいる！そのことを力強く感じながらこれからもお過ごしいただけた

らと思います。この仙台での大会、これが皆さまの記憶に止められながら、これからの皆さまのお働きになりますよう祈念いたします。仙台においてくださいます本当にありがとうございました。

決意表明

仙台支部 伊東 由美子

私たちは「今、生かされている命の分かち合い」をテーマに第55回大会を終了します。今回私たちは、東日本大震災の被災地でパネリストの方々、および講演した方々から体験談とその思いを知ることができました。そしてまた余震までも体験いたしました。東日本大震災は未曾有のできごとと言われ、復興もまだまだです。手付かずのところがたくさんございます。いまなお不自由な生活を強いられている兄弟姉妹がいることを忘れてはなりません。そんな中でもこの大会を開催することができた私たちは、本当にありがたく大きな喜びです。この2日間「生かされている命の大切さ」このことを振り返り、自分には何ができるのでしょうか。職場や地域に戻ったとき、病める兄弟姉妹はもちろん、その家族の話に耳を傾け寄り添い、そして一人でも多くの人々の気持ちが明るくなりますよう努めましょう。また、自分自信の健康を大事にしなが生活ができることを願いつつ、この大会に参加できたことに感謝して、決意表明といたします。



次回大会への引き継ぎ



閉会の辞

日本カトリック看護協会仙台支部 支部長 古関 睦

皆さま、この2日間大変お疲れさまでした。大変有意義な大会になったと思っただければと思います。これをもちまして第55回日本カトリック看護協会全国大会 in 仙台を終了させていただきます。ありがとうございました。

オプション 被災地見学



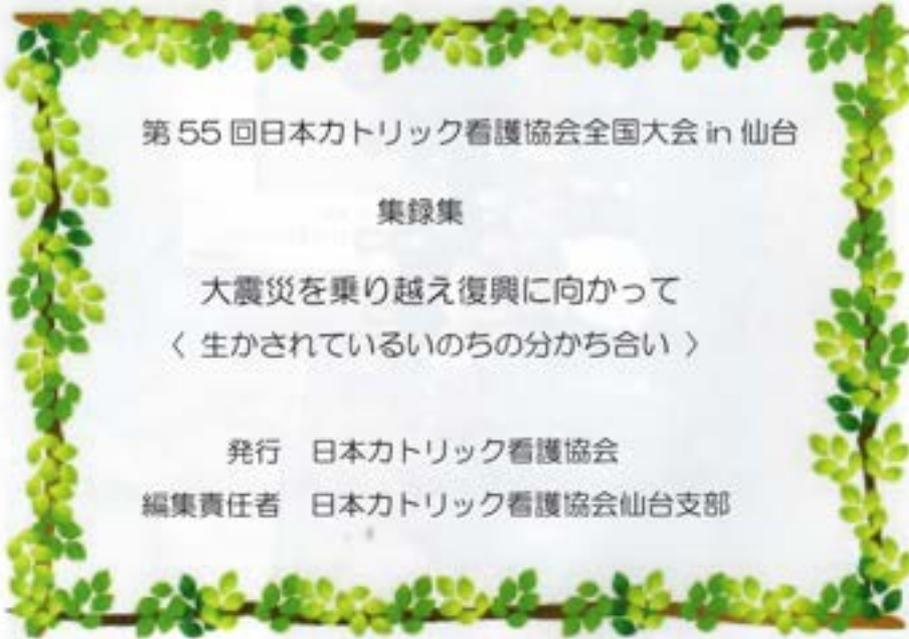


編集後記

JCNA 全国大会から5ヶ月になり、ここに収録集が完成した喜びは大きなものです。振り返ると仙台支部の少ない会員で全国大会を開催する力には全然及ばない状態でした。しかし JCNA は自分たちの力、能力で成し遂げることはありません。神の偉大な力を信じて「無力なところに働いてくださる神への信頼」をもとに信じて準備をすすめていきました。

本当に様々なことがありました。全国大会が終わった時に私たち一同はたくさんの方々のご協力、支えに心から感謝しました。ありがとうございました。

神の不思議なみ業がこの大会を通して現れました。(Sr.熊谷)



第55回日本カトリック看護協会全国大会 in 仙台

集録集

大震災を乗り越え復興に向かって
〈 生かされているいのちの分かち合い 〉

発行 日本カトリック看護協会

編集責任者 日本カトリック看護協会仙台支部